

勝手に書きます銀河英雄伝説外々伝

パウ[。]ル

作・フミラ

*キーボードの下矢印キーを押すことにより、次ページへと進めます。

ランド・カー

地上車の中で、ビッテンフェルトは憮然としていた。彼は今、この世で一番彼の気にいらなかった男の屋敷に向かつて走っているのだ。その男の死を伝える為に……。

（全く、オーベルシュタインの奴、死ぬならもつと早くに死んでおけば良いものを……。そうすれば、だいぶん世の中、さっぱりしていただろうにな。一年早ければ、ロイエンタールの奴も、あんな事にならずに済んだかも知れん。それにしても、何も依りにも依って皇帝陛下と同じ日を、自分の命日に選ばんでもよかるうが!! どうせ今まで、死神にさえ嫌われていたのだから、陛下の葬儀が終わるまで、死神の奴を待たせておけば良かったのだ!）

二〇分程前、ビッテンフェルトは、ミッターマイヤー元帥に呼ばれ、ヴェルゼーデ仮皇宮の中に

設けられた臨時の元帥執務室に居た。

「ビッテンフェルト、悪いがオーベルシュタインの官舎へ赴いては呉れまいか？」

その依頼は、思いもかけないものであった。

「どうして俺が行かねばならんのだ？俺は皇帝陛下のお側にいるぞ、元帥。卿がなんと言おうがな。」

当然のようにビッテンフェルトは、怒気すら含んだ声で、彼よりずっと小柄な男に喰ってかかった。「……気持ち判る。判るが、誰かが行くしかないのだ。軍務尚書の死は、未だ公になっておらん。だが、あいつの家者には、早く知らせてやる必要があるろう。最期を看取った軍医たちの話では、遺言もあると云うし、その内容も知っておく必要があるだろう。」

「そんなもの、ワイジホンTV電話で済ませれば良いではないか！」

「……そうも行くまい。奴の地位を考えてみる、好き嫌いの感情は別として、やはり、其れなりの敬意は示さんと。オーベルシュタインを元帥に

叙せられたのも、軍務尚書に任ぜられたのも、皇帝陛下であらせられるのだぞ。」

「うっ！し、然し、何も俺でなくとも良いではないか？ミユラーだってワーレンだって居るではないか？そうだ、ケスラーはどうだ？奴なら士官学校の同期の筈。」

「それも考えたが、ケスラーは、皇帝陛下の崩御の公表で治安に影響の出ないよう、憲兵隊を指揮して貰わねばならん。何しろ、あのオーベルシュタインがいなくなったのだ。ケスラーは、軍務尚書の方も一人で治安に責任を負っている。ミユラーとワーレンには、ヤン・ウェンリーの後継者と知己の間柄ということで、イゼルローンの連中との折衝をやって貰っている。」

「メックリンガーは？」

「彼には幕僚総監として、大本営の運営・維持を担当して貰っている。それに俺としても、メックリンガーには、暫くの間、俺のすぐ近くで、諸事の補佐をして貰いたい。とても俺一人では、対処しきれないのでな。ビットェンフェルト、卿も、デ

スクワークをするよりは体を動かしている方が
良いのではないか？机の前に座って、皇帝陛下の
国葬の準備の書類を眺めているよりは？」

痛いところを突かれた！とビッテンフェルト
は思った。確かに、彼にとって、書類を眺めてい
るのは、苦痛以外の何物でもなかった。戦闘の為
の作戦案ならばともかく、式典の計画だの経費だ
のの書類は、従卒の手の中にあるうちから、彼の
頭を痛くした。だから、いつもビッテンフェルト
は、その手の書類は内容の把握を副参謀長のオイ
ゲンに任せ、オイゲンが是とした書類に承認のサイン
を与えていた。これは、実際には、組織とし
て極めて危険な事であり、ビッテンフェルトが、
その責任をないがしろにしているとの批判も免
れ得ぬところであったが、幸いにしてオイゲンは
実務の面でも有能であり、彼より年少の上官を保
護者のような気持ちで愛している無私の人であ
ったので、大過なくすんでいた。

「そういう事ならばやむをえんか・・・。仕方あ
るまい、行って来よう。」

実に消極的にミッターマイヤーの依頼をのみ、ピッテンフェルトは退出したのだった。

ランド・カー

地上車が止まった。小ぢんまりとした、一見何の変哲もない二階建ての家の前であつた。庭には何本かの大木が立ち、月の光を遮っている。美しく整えられた芝生の上には、数時間前の嵐の名残か、落ち葉が積もっていた。その上をピッテンフェルトは歩いていった。玄関の呼び鈴を鳴らす。しばらくして邸内に明かりが灯り、七〇代と思われる男性が、覗き窓からこちらを見た。

「どちら様でしょうか？」

「このような時刻に申し訳ない。小官は、ピッテンフェルト上級大将である。火急の用件で伺つた。オーベルシュタイン家の執事、ラーベナルトとは貴殿か？」

「はい、左様でございますが……どの様なご用件でございますしょう？ 生憎と主人は仮皇宮に伺候しておりますて不在でございますが……」。

（可哀想に。何も知らんのだから無理もない

が・・・)

ビッテンフェルトは、自分の次の一言で、この忠実な執事が受けるであろう衝撃を思うと、苦い思いを禁じ得なかった。

「知っておる。・・・軍務尚書閣下は、先程、ヴエルゼーデ仮皇宮に於いて、地球教の残党共の暴挙により亡くなられた。」

数瞬の沈黙の後、ラーベナルトはドアを開き、ビッテンフェルトを屋敷の中へと招き入れた。黙って彼を見つめるラーベナルトに、ビッテンフェルトはオーベルシュタインの最期の言葉を伝えた。

「遺言状は、デスクの三番目の引き出しに入っているから、遺漏なく執行すること。それから犬にはちゃんと鳥肉をやってくれ。もう先が長くないから好きなようにさせてやるように　　以上だ。それから、これはミッターマイヤー元帥からなのだが、遺言状の内容が知りたい。おそらく軍務尚書の葬儀は国葬となるだろうが、何か希望があれば叶えてやりたいとのことだ。」

ラーベナルトは黙ったまま頷くと、ビッテンフェ

ルトを居間のソファアへ案内し、暫くお待ち下さいと言ひ残して二階へ去つた。おそらくオーベルシュタインの私室へ行つたのだらう。

（それにしても、もう少し驚くかと思つたのに、意外な程落ち着いていやがつたな、あの執事。）

居間の中を見渡すビツテンフェルトの目に、暖炉の前で寝ているダルメシアン種の老犬の姿が入つた。

（あれが、オーベルシュタインの犬か。主人の死も知らずに眠っているのか。まったく、使用人も犬も、主人に似て可愛げのない……。まあ、オーベルシュタインが死んでも悲しくないつていうのは判らんでもないがな。）

そんなことを考えていると足音がした。

「お待ちせいたしました。」

そこには、封筒を手にしたラーベナルトともう一人別の人物が立っていた。

（えっ！お、女!?)

ラーベナルトの隣に立っていたのは、黒衣をまとつた二〇代前半位の女性であつた。美貌といつて

良いだろう。すらりとした姿、女性としては、かなり長身であった。蒼みがかかった灰色の瞳は、ビットンフェルトを見て怯えているように見えた。そして、何より印象的だったのは、その髪の色であった。銀髪、それも、今は亡き僚友ファールンハイトの様なプラチナブロンドではなく、新雪のように真っ白な髪。

（何だって女がいるんだ!? そんな話、聞いていないぞ。あいつ、ロイエンタールの事をとやかく言っていたくせに、自分も女を困らせていやがったのか！だが、オーベルシュタインと女なんて・・・やっぱり似合わん。どう考えたって女に好かれる人間ではあるまい。）

思いがけない人物の登場に、ビットンフェルトは自分がここへ来た理由も忘れ、半ば呆然とその女性を見つめていた。

「ビットンフェルト閣下、こちらが主人の遺言状でございます。そして、こちらの方は主人の従姉妹にあたられます、エリザベート・フォン・ケストナー様でございます。」

「フロイライン・ケストナー、この度は、誠に、何と言って良いか、その・・・心よりお悔やみ申し上げます。」

ラーベナルトの言葉で我に返ったビットンフェルトは、しどろもどろながら、エリザベートなる女性に挨拶をした。

「・・・ありがとうございます、ビットンフェルト閣下。パウル兄様はこのような日がくることを覚悟しておりました。・・・あの、私たち、この後、どの様にしたらよろしいでしょうか？・・・それから、パウル兄様の遺体は？」

蚊の鳴くような声で、しかも震えていたが、エリザベートは何かに耐えて絞り出すように尋ねた。痛々しそくにそれを見やりながら、ラーベナルトが口を開いた。

「主人の遺言状では、葬儀は出来るだけ簡素なものにして欲しいとのこと。国葬などではなく、身内だけでと。・・・もっとも、御身内といっても、このエリザベート様お一人だけですが。」

ラーベナルトの言葉にビットンフェルトは答え

た。

「その件は、ミッターマイヤー元帥達とも相談して決めることになるだろう。フロイライン・ケストナー、オーベルシュタイン元帥の御遺体は、ヴェルゼーデ仮皇宮に安置してあります。そのまま仮皇宮に安置されるにせよ、こちらの官舎へ移されるにせよ、ひとまず、フロイラインも仮皇宮へ行かれた方がよろしいでしょう。小官の地上車ランド・カーをお使い下さい。小官も御一緒にいたしますから。」

エリザベートは黙って会釈し、謝意を表した。

仮皇居へ向かう地上車ランド・カーの中は、オーベルシュタインの官舎へ来る時以上に息苦しかった。ビッテソフエルトは、隣に座る白髪の女性の今にも折れそうな体を見やりながら、その女性が、今や体以上に折れそうな精神を、必死にまっすぐに保っているのを感じた。

無言のまま、地上車ランド・カーは仮皇居の敷地に滑り込み、エリザベートは邸内の人となった。彼女を迎えたミッターマイヤー元帥をはじめとする高官達に

会つても、彼女は一言も言葉を発せず、深く頭を垂れ、挨拶をするだけであつた。

高官達も、彼女に言葉を求めようとはしなかつた。おそらく、彼女は今、自分を保つ為に全エネルギーを集中させているのだ。一言でも発したら、そこからポツキリと音を立てて、彼女の精神の支柱は折れるだろう。

ビッテンフェルトは、エリザベートを、軍務尚書の遺体が安置されている一室へと案内した。ガラスケースの中に、既に軍服を着替えさせられて、軍務尚書の遺体は横たわっていた。その冷徹なる義眼も閉じられたままであつた。

「一人に、いえ、パウル兄様と二人にしていただけですか？」

再び可聴域ぎりぎりの音量で、エリザベートの口から言葉が絞り出された。ビッテンフェルトは頷いて部屋を出た。

ドアを閉め、部屋から少し離れた場所で、廊下の窓から外を眺めた。

カイザー
(皇帝ラインハルトの下で共に戦つた者達が、ど

んどん天上へ去っていく。あのオーベルシュタインさえ死んだのだ。それにしても、あの女性は一体、オーベルシュタインの何なのだろう。「パウル兄様」などとオーベルシュタインのことを呼んでいたが……。執事は従姉妹だと言っていたが、本当だろうか？全然似てないぞ。もっとも、オーベルシュタインに女がいるなどと言う方が、もっと信じられんが……。それにしても、見事に真つ白な髪だったな。やはり、あれか、オーベルシュタインと暮らしてはは気苦労が絶えなからか？)

そんな取り留めのない事を、ビッテンフェルトは考えていた。彼が女性のことですぐ詮索するなどということば、これまでに無い事だったのだが。

何かが、ビッテンフェルトの耳を刺激した。女の声で子守歌だった。オーベルシュタインとエリザベートのいる部屋から漏れてくる。先程のあの小さな声とは別人のようにはつきりとした歌声。

大声を出しているのではなかった。持ち主の意志

と関わりなく、その歌声は周りの空気を震わせ、その空気は、また周りにその響きを伝えた。小さいが、はっきりと遠くまで響く声。

ヴァルハラ

「それはまるで、彼女の想いを、天上の軍務尚書に届けようとするかのようであった」(エルネスト・メックリンガー)

ビッテンフェルトは、悪いとは思いつつ、ドアを僅かに開けて中の様子を覗き見た。

ガラスの棺の上に片手を置き、エリザベートは座っていた。その蒼みがかかった灰色の瞳は、瞬きもせず、ずっと棺の中の人物を見つめていた。

おそらく、死者に向けられた視線の中で、これ程プラス方向の感情だけで構成されたものはなかったであろう。オーベルシュタインは、誰からも嫌われていたが、それを補って余りある好意を、この女性から得ていたのだとビッテンフェルトは知った。

ビッテンフェルトは、彼らしからぬ事であったが、決して音を立てぬよう、細心の注意を払って再びドアを閉めた。

その後も、エリザベートは何度も繰り返し繰り返し、古い子守歌を歌い続けていたが、やがて歌声は途切れがちになり、かすかな嗚咽にとつてかわった。

皮肉な事であったが、七月二七日にオーベルシュタイン邸を訪れた事が、ビッテンフェルトの一生を左右することになった。

ビッテンフェルトは、そのまま軍務尚書の葬儀の責任者に任じられたのである。葬儀は軍務尚書の遺志を尊重し、なるべく簡素にということになったが、元帥で、現役の軍務尚書となれば、身内だけという訳には行かず、やはり国葬となった。オーベルシュタインが意見を述べる事が出来たならば、

「死を悼む気持ちが無いのに悼むふりをするのは、偽善であるだけでなく、費用と労力の浪費だ。」

とでも言ったかも知れない。

オーベルシュタインの国葬は、カイザー皇帝ラインハル

トの国葬の後となったので、冷凍ケースに入れられたオーベルシュタインの遺体は、官舎へ移され、埋葬されるまでの数日を親しい者達と過ごす事を許された。ラーベナルト夫妻と犬、そしてエリザベート・フォン・ケストナー、それだけが彼の「親しい者」であった。

ビットェンフェルトは、彼らの今後の事も含めて打ち合わせの為に、オーベルシュタイン邸を度々訪れる事となった。そして、エリザベート・フォン・ケストナーが、本当にオーベルシュタインの年少の従姉妹であり、四歳の時よりオーベルシュタインの被保護者であった事、かなりひどい人見知りがある事、その為、歌の才能をヴェストパーレ男爵夫人の学校に在学中から高く評価されたにもかかわらず、卒業後は殆ど邸内に閉じこもり、人にその存在を知られなかった事などを知った。

ラーベナルトは言った。

「閣下がパウルの訃報を持っていらっしやうした時、エリザベート様が閣下にお礼を申し上げ、ご指示をお求めになられた事を覚えておいでで

すという失敗を冒してしまったのである。オーベルシュタインが誕生し、その眼球に重大な欠陥があると判明した時、母親は、全ては自分のせいであると悲嘆に呉れた。幸い、視神経や大脳視覚領には、何の異常も認められなかったので、光コンピューター内蔵の義眼の使用によって、パウルと名付けられた乳児は、日常生活に不自由なく成長することとなった。

今から二〇年前、パウル・フォン・オーベルシュタインは、士官学校の生徒であった。その身体的障害が遺伝的なものではなく、妊娠初期に受けた跳躍の影響であると認められて入学を許可されたのだが、晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世より前の時代であつたら、決して許されなかったに違いない。卒業を目前として、オーベルシュタインは大きな希望を抱えていた。彼はどの教科においても、首席とはなり得なかったが、必ず上位一〇名の中に名を連ねており、「なかなかに優秀」との評価を得ていた。また、大貴族の息子共

と違つて、自分には、忍耐力も自制心もあり、どの様に困難な状況の中に放り込まれても、冷静な判断と沈着な行動を取りつるといふ自信もあつたのである。生まれつきのハンディ・キャップも光コンピューター内蔵の義眼があれば、彼の行く手を阻む障壁とはなり得ぬ筈であつた。卒業後の任地として、彼は、艦隊勤務を希望していた。それは、軍の中でやはり花形であり、武勲を立てるには格好の場所であつたから。そして、武勲を立てさえすれば、昇進は付いてくる筈であつたから。この当時、オーベルシュタインの家族と呼べる人達は、母と叔母夫婦、そして、未だ幼い従姉妹のエリザベートだけであつた。父は軍人だったが、二年前に戦死していた。

叔母は、母の一二歳違いの一番下の妹で、両親、つまり、オーベルシュタインにとっては母方の祖父母の死後、姉の嫁ぎ先であるオーベルシュタイン家で暮らしていた。義兄、つまり、オーベルシュタインの父が、自分は軍務のために家を開けることが多いから、姉妹が一緒の方がお互い心強い

だろうと言つて、自宅に引き取つたのである。

一三歳年長の叔母は、オーベルシュタイン少年にとつて、姉の様な存在でもあつた。

叔母は、オーベルシュタインが、幼年学校の三年生の時に、オーベルシュタインの父の友人で内務省官吏のアクセル・フォン・ケストナーと結婚した。休暇で帰宅する度に、叔母夫妻の家を訪れるのが、少年の楽しみであつた。少年の母は、時折、その頃まだ健在だつた夫に、

「パウルつたら、帰つてきてもすぐにケストナー家へ行つてしまふんですよ。少し妬けますわ。」

とこぼしたが、後に後悔した。ケストナー家の居間は、彼女の息子にとつて、くつろげる唯一の場所だつたと判つたからである。少年は、母親が少年の目のことで悩み、負い目を感じている事を幼少の頃より感じており、その為、母親の許にいても決して心よりくつろぐ事が出来なかつたのである。お互い、相手のことを気遣うあまり、お互いの重荷となる事もあるのだ。

幼年学校卒業の年、叔母夫妻の間に女兒が誕生

した。エリザベートと名付けられたこの赤ん坊を、オーベルシュタインは崇拜した。蒼みがかかった灰色の瞳とダークグレーの髪、白せきの肌。いつもにこにこ人なつくく、オーベルシュタインに手を伸ばす乳児。何の他意も無い無垢な笑顔に、オーベルシュタインは夢中になったのである。

休暇で街に出る度、オーベルシュタインは、ベビー用品の店を訪れ、彼女の為におもちゃを買って帰ったものである。然し、流石に思春期の少年としては恥ずかしかったのか、周囲の友人にも内緒であった。この為、オーベルシュタインは、「秘密主義者」の烙印を押され、同期からも疎まれる事となった。

成長するにつれ、エリザベートは益々オーベルシュタインを喜ばせた。三歳の時、エリザベートは言ったものである。

「パウロお兄ちゃま、エルザ、大きくなったら、パウロお兄ちゃまのお嫁さんになってあげる。」
一八歳のオーベルシュタインには、それが幼女が必ず通る道と分かっていた。そう、自分が女であ

ると気付いたら、身近な男性、父や兄のお嫁さんになろうと、一度は誓うものなのだ。でも、その対象が自分だったというだけで、オーベルシュタインは幸せだった。

そして、エリザベート四歳、オーベルシュタイン一九歳の夏、悲劇は起こった。

公になっている事実はこれだけである。

帝国暦四七一年（宇宙暦七八〇年）七月、ゴールデンバウム王朝の首都星オーディンの閑静な住宅街で、放火による火災が発生した。被害にあったのは、内務省官吏アクセル・フォン・ケストナー邸であり、ケストナーは、夫人と共に、犯人により事前に射殺されていたらしく、焼け跡から二人の遺体が発見された。夫妻の娘エリザベートは、重傷を負っていたものの、幸いなことに殺害を免れ、屋外にて従兄弟パウル・フォン・オーベルシュタインによって発見、保護された。犯人は不明。

然し、オーベルシュタインは、事実、或いは殆

ど事実と思われる事を突き止めていた。

その日、オーベルシュタインは、夏期休暇で家に帰っていた。折悪しく激しい雷雨で、ケストナー家へ行くつもりが出そびれていた。

（雨が小降りになったら、すぐに行こう。エルザが、この人形を気に入ってくれるといいのだが……。）

従姉妹へのプレゼントを片手に、オーベルシュタイン邸二階の自室の窓から、ケストナー邸の方角を見やっていた彼は、突然の爆発音と火柱に驚いた。正に彼の見ている方角で、それは起こったのである。

まさかと思いつつ階下へ駆け下りたオーベルシュタインは、傘も差さずに豪雨の中へ飛び出した。

「パウル、パウル、どうしたの？」

「パウル様、せめて傘を！」

母やラーベナルトの声を無視して、オーベルシュタインは走った。走って、走って、叔母夫妻の家の前に着いた時、オーベルシュタインの義眼に映

つたのは最悪の光景であつた。ケストナー邸が燃え上がっていた。裏で犬の鳴き声がある。ケストナー家で飼っているダルメシアンだつた。

「いや！助けて、お父さん、お母さん！！」
フーター ハッター

エルザの声だ！オーベルシュタインは、裏庭へ駆け込んだ。ブラスターの発射音。逆光の中、犬の影がエルザのそれと重なり、閃光に貫かれた。エルザの体がゆっくりと倒れる。犬の体がその上に鈍い音とともに崩れ落ちた。

「やつたか？」

「さあ、どうかな？犬が邪魔しやがったから……。」

二人の男の声

「誰だ!! 何をしている?」

オーベルシュタインは、男達に飛びかかっていた。不意を突かれたのか、ブラスターを手にしていた男がよろめき、その手からブラスターが離れた。炎に赤く照らされた二つの顔をオーベルシュタインは、はっきりとその義眼に捉えた。消防車の音が聞こえる。おそらく警察も近づいているに

違うない。

その時、エリザベートが弱々しい声をあげた。

「う……うん……」

「エルザ！」

オーベルシュタインの注意がそちらに取られた瞬間、男達は、オーベルシュタインを殴りつけた。目の前が暗くなった。

気が付いた時、オーベルシュタインは、医療チームの人間に囲まれてベッドに横たわっていた。

「君、大丈夫かね？」

リーダーらしき人物が、声をかけてきた。

「はい、私は……。エルザは？エルザはどこです？」

「エルザ？あの女の子のことかね？安心し給え。重傷だが急所は外れている。今、手術中だ。あの犬が盾となつて、弾がそれたんだな。不幸中の幸いだった。」

「叔母夫婦は？」

「……。」

数瞬の沈黙が、オーベルシュタインに真実を伝え
た。

やがて、警察の取り調べの人間が来て、幾つか
の質問をしていった。オーベルシュタインは、目
撃した男達の顔を、モニタージユ写真作成ソフト
で再生してみせた。係官は、

「これだけ、はつきりしていれば、すぐ割り出せ
るよ。」

と言つて病室を去つていったが、遂に犯人の割り
出しには到らなかつた。オーベルシュタインが、
その件で当局に問い合わせると、こんな返答が返
つてきた。

「君の見たのは、幻覚だろう。君は義眼だそうだ
が、あんな状況では、正確な視覚は得られないも
のよ。」

退院したオーベルシュタインは、叔母夫妻の葬
儀に出席した。そして参列者の中に、あの男達を
見出した。年は若い、叔父の上司で、門閥貴族
の子弟と言うことだった。美人と評判の高かつた

叔母に興味を示したのを、叔父が手ひどくはねつけたらしいという事も、参列者達の間で小声で交わされていた会話から分かった。

（当局は、権力に屈したのだ！）

オーベルシュタインは齒がみした。こんな理不尽なことがあって良いのか？怒りはエリザベートの病室を訪れた時に更に燃え上がった。

エリザベートの看病をしていたオーベルシュタインの母は、オーベルシュタインが病室を訪ねると、沈痛な面持ちで息子に言った。

「パウル、驚かないで頂戴ね、エルザがどんなに変わっていても……。いいわね、パウル？」

母親の向こうに、小さなエルザの姿があった。

オーベルシュタインは息をのんだ。ダークグレーだった筈のエリザベートの小さな頭は真っ白だった。恐怖によるものと医師は説明したが、エリザベートの体の傷が癒えるにつれて、エリザベートの変化は益々はつきりしてきた。あの人なつつこかったエリザベートが、人を恐れるのである。

特に若い男性の姿を見た時は、ひどく怯えて、半

狂乱と言っても良かった。笑顔はすっかり影を潜めた。可愛らしいお喋りが口を突いて出ることも無くなった。あれ以来、雷が鳴るとしがみついてきて離れないエリザベートを抱きしめて、パウエル・フォン・オーベルシュタインは自らに誓った。いつか必ず、エルザの敵を討つてやる。敵は、あの二人だけではない。今の権力そのものだ。

オーベルシュタインの怒りは自らにも向けられていた。あの日、何故、雨でもケストナー家へ行かなかったのだろう。あと一〇分早く家を出ていたら、エルザをこんな目に遭わせずに済んだかも知れないのに。怒りは、やがて他の感情も道づれに、冷たい炎となって凝結していった。

やがて、エリザベートは退院し、オーベルシュタイン家の住人となった。五年後にその年流行した悪性の風邪　フリードリッヒ四世の皇后が、これに罹って亡くなった為、皇后風邪と呼ばれている　をこじらせて亡くなるまで、オーベルシュタインの母親は、傷心の幼い姪を、わが子の様に可愛がったが、彼女の心は、なかなかそ

の傷口を塞がなかった。そして、オーベルシュタインは出世より従姉妹を選んだ。士官学校を卒業したオーベルシュタインは、当初の希望を取り下げ、後方の地上勤務を希望したのである。艦隊勤務では、エリザベートの世話をすることなどできなかったから。

「成る程、あの白髪には、そんな訳があったのか。」

ビットンフェルトはラーベナルトの話を書いて嘆息した。

「はい。」

「オーベルシュタイン元帥が、前線に出ることが少なく、後方勤務でデスクワークに精を出していたのも、全てフロイライン・ケストナーの為だったという訳か？」

「おそらくは。」

「でも一生、オーベルシュタインの屋敷の中にもって過ごす訳にもいかんだろう？どつするつもりだったんだ？・・・まさか、・・・まさか、

自分の嫁さんにでもするつもりだったのか？一
五歳も年下の従姉妹を？」

「さあ、その辺りの事は、私には判りかねます。

大奥様はそれも良いとお考えでいらっしやった
ようですが。エリザベート様は無口でいらっしや
いますから、あまり外見からは分かりませんが、
実に怜悧な方でございます。ヴェストパーレ男爵
夫人の学校においでの時も、男爵夫人が、恐れ多
い事ながらフロイライン・マリンドルフ、今の後
妃様と、殆ど遜色無しと言われたそうにございま
す。后妃様はそれが誰の目にも明らかだが、エリ
ザベート様は自分と自分の信じる者にしかそれ
を明かさない、と。ですから、パウル様の伴侶と
して充分であると思われたのではないかと存じ
ます。然し、パウル様はエリザベート様の望まぬ
事をなされる方ではございませぬし、エリザベ
ート様はご自分のお気持ちを出されぬお方でいら
っしやいますから、大奥様がそれを望まれてもな
かなか難しかったことと思います。」

「ふーん。」

冷徹一辺倒、無情の権化とばかり思っていたオーベルシュタインの意外な話に、ビッテンフェルトは何と言えば良いのか判らなかつた。これまでの自分のオーベルシュタインへの嫌悪感は、彼の手段を選ばぬ策謀家ぶり、前線で軍の指揮を執るのではなく、後方の安全地帯で、デスクワークをしている卑怯者という印象が強かつた為であつた。もっとも、オーベルシュタインは決して卑怯者などではなく、命じられれば最前線だろうと顔色一つ変えずに赴いたに違いないのだが、ビッテンフェルトにとって、武人としての矜持は前線で敵と戦つてこそ保たれるものであつたから、その価値観から遠く隔たつた場所に立っている義眼の軍務尚書を、ビッテンフェルトは軍官吏としての能力は高く評価しつつも好きになれなかつたのである。

だが、オーベルシュタインの矜持が、幼い従姉妹を守りきれなかつたという事で傷つき、それを回復する為に、彼に出来る事を懸命に二〇年の長きにわたりこなしていたのだとしたら・・・そ

れは、武人として以前に、一個の人間として称賛に値する事だったのではないか？これまでと異なったオーベルシュタインへの感情が、ビッテンフェルトの精神に芽生えるのを、ビッテンフェルトはどうすることもできなかった。それは、あまり快いものではなかったが。

新帝国暦 三年（宇宙暦八〇一年）八月一日、先帝ラインハルト・フォン・ローエングラムの葬儀は、簡素な中にも荘厳に執り行われた。

ゴールデンバウム王朝の皇帝達の場合、その葬儀は幾日もかけて行われ、また、その費用たるや天文学的数字であったが、カイザーリン・ムッター 皇太后 ヒルデガ

ルドをはじめ、國務尚書マリンドルフ伯、財務尚書リヒター、内務尚書オスマイヤー、民政尚書ブラツケ達はそれを愚とし、軍部もそれに同意した。

ヒルダは、国民に対し、皇帝の崩御を公表した折りに、大葬の日以外は、服喪するに及ばない旨を伝えた。一般市民の生活が、皇帝の死によって停滞する事は、最小限に抑えるべきであると考え

たからである。そして彼女の亡夫も、そう考えるはずであった。

葬儀の計画の上で、一番問題となったのは、墓所を何処にするかという事であった。

「皇太后陛下も、アレク陛下も、フェザンにおいでなのだから、先帝陛下の墓所はフェザンに設けるべきであろう。」

とオスマイヤーは主張した。確かに、結婚して僅か半年でラインハルトを失ったヒルダの心中を推し量れば、せめて死後はお側に置いて差し上げたい、と臣下の者達は思った。

然し、ヒルダは別の意見を持っていた。

「内務尚書のお心遣いは嬉しいのですが、私は陛下をキルヒアイス元帥のお近くで眠らせて差し上げたいと思っております。私は以前、遷都したばかりのフェザンに、グリユーネワルト大公妃殿下をお呼び寄せになられては如何ですかと陛下に申しあげた事がありました。その時、陛下は、こう仰いました。オーディンには、キルヒアイスが眠っている。死者を生者の勝手に動かすわけに

は行かない。自分もいずれオーディンに戻るつもりだ、と。もし、グリューネワルト大公妃殿下が、今後、フェザーンで私達と一緒に暮らし下さるなら、キルヒアイス元帥には申し訳ない事ながら、元帥の墓所を移す事も考えようと思いましたが、姉君はアレクの戴冠式が終わったらオーディンへ戻りたいとの御意向です。ですから、私は陛下の墓所はオーディンにと思います。大丈夫、陛下の墓所が何処にあると、陛下の御心は私達と共にあるのですから。」

こうして、ラインハルトは惑星オーディンで赤毛の親友と並んで、少年の頃見上げたと同じ星座を天蓋に飾り眠ることになったのである。

この決定はオーベルシュタインの葬儀にも影響を与えることになった。大葬の翌日に軍務尚書の国葬は決定していた。

ビットェンフェルトはオーベルシュタイン邸で、再びエリザベートと対峙した。

「フロイライン・ケストナー、皇帝陛下の墓所は、惑星オーディンにと決定致しました。オーベルシ

ユタイン元帥の埋葬先はどちらになさいますか？元帥の遺言状には、その件に関する記述はありませんでしたので、フロイラインの御希望を伺いたい。」

「・・・パウル兄様は、皇帝ラインハルト陛下に忠誠を尽くしておりました。陛下がオーディンへ行かれるならば、パウル兄様もオーディンに眠ることを望むに違いありません。ただ・・・ただ、陛下やキルヒアイス元帥のすぐ近くではなく、少し離れた所に埋葬して頂けませんか？パウル兄様は、キルヒアイス元帥を、あの様な形で失った原因の一端が、自分にあつたという事を、決して忘れておりませんでした。陛下に申し訳ないと思っていたのです。決して自分の意見が間違つていたとは思わないが、結果としてローエングラム王朝にとって最も重要な人物を失った責任は免れないと・・・。死んでからまで、お二人の邪魔はしたくないと考えているに違いありません。私、あまり地理に詳しくないので、申し訳ないのですが、そんな場所がありますでしょうか？」

ラーベナルトから、エリザベートの生い立ちを聞いていたので、ビッテンフェルトには、エリザベートが自分にこれだけの事を話すのに、どれ程彼女自身を鼓舞せねばならないかを推察する事が出来た。

（本当は逃げ出したいのだろうな。面識もなかった男が、突然やってきて、今まで自分を守ってくれたパウル兄様の死を伝え、葬式の相談をしているのだから。全ては、パウル兄様の為・・・か。）
全てはパウル兄様の為・・・そう思った時、ビッテンフェルトの胸を名状しがたい思いが刺した。
（そうだ、この女性は、あいつの為に無理をして、この俺と話しているのだ。無理をして、この俺と・・・。）

そんな想いに、自分がとらわれたという事実、次の瞬間、ビッテンフェルトは驚愕した。

（全く！何を考えているのだ！俺としたことが！！）

「場所については調べさせましょう。」
と言いながら、慌てて立ち上がったビッテンフェ

ルトは、勢い余って後ろへ椅子を倒してしまった。焦って椅子を直そうと体をねじったところ、今度は、肘でテーブル上のコーヒーカップを引っかけ、カップは床の上で粉々に砕けて、その中身で褐色の花を絨毯の上に描いた。

「あつ、も、申し訳ない！」

急いでコーヒーカップの破片を拾おうとして身をかがめ、今度はテーブルにしたたか額を打ち付けた。頭を抱えて座り込んだビットンフェルトを見て、びつくりした顔で一連の事態を見つめていたエリザベートが、心配そうにビットンフェルトに近寄り、彼の顔を覗き込んで尋ねた。

「大丈夫ですか？」

ビットンフェルトは、ばつの悪そうな笑顔を浮かべて

「大丈夫です。良くあることです。斉射三連といったところです、今日は。」

と答えながら立ち上がったが、額はまだ、ひりひりしていた。

「あら、大変、血が出ていますわ。余程強くぶつ

けられたのですね。こちらへいらして下さい。手
当しなくては。あ、心配なさないで。後

片付けは私が致しますから。ラーベナルト、ラー
ベナルト、申し訳ないのだけれど、救急箱を持っ
てきて頂戴。それと掃除道具も。」

ときはきと指示を出し、エリザベートはビット
フェルトの額の手当とコーヒーカップの後片付
けを済ませた。

「とんだ所を見せてしまって・・・コーヒーカ
ップも壊してしまっただし、誠に申し訳ない。」

と謝るビットフェルトに、エリザベートは、か
ぶりを振って答えた。

「いいえ、とんでもありません。大したことがな
くてよろしゅうございました。」

エリザベートの表情は、これまでにビットフェ
ルトが見てきた、緊張したものではなかった。内
側から自然にほころんだ柔らかな微笑みのヴェ
ールがエリザベートの顔を包んでいた。それを見
てビットフェルトは、彼の心臓が急に踊り出す
のを感じた。

出来る限り、普段通りの声で、ビットンフェルトは尋ねた。

「先程の件の続きですが、もしオーディンに埋葬となったら、フロイラインはどうなされる？オーディンまで行って埋葬に立ち会われますか？」

「出来ましたら……。パウル兄様の眠る場所を、しっかりとこの目で確かめておきたいですし……。」

「その後の事は？」

「パウル兄様の遺言の執行もありますし、一度フエザーンに戻って来るつもりです。全ての件が片付いたらオーディンに行つて、あちらで暮らそうと考えておりますけれども。パウル兄様が、オーディンにあるオーベルシュタイン家の屋敷を残してくれましたし、ラーベナルトもこのまま私と一緒に暮らしてくれると申しておりますので。」

「こんな事を申し上げては何ですが 生活費の面で心配はないのですか？遺族年金も従姉妹までは支給されないと、財務省の奴等が言っております。何とかするよう、軍務省の方に声を掛けておきましたが……。」

「御心配には及びません。パウル兄様が、生活に困らない程度のもは準備しておいてくれましたし。それに先日フェルナー少将がいらして、被保護者であった事がはっきりと判れば、従姉妹にも年金が下りるよう、財務省側と話して下さったそうです。私の事だけでなく、他にもそういう立場の方達がいるのだからと仰って、軍務省へ押し掛けた方がいらっしやったと伺いましたが、ビットンフェルト閣下のことでしたのね？」

「いや、何、当然の事を言っただけです。長く続いた戦乱で、遠縁にしか頼れる者が残っていない人間は沢山います。唯一の保護者が亡くなった時、全く生活の保障がないのでは、死んでいった兵士に、会わせる顔がありません。」

「……。ありがとうございます。その方達の方もお礼を申し上げます。閣下は猛将と伺っておりましたけれども、お優しい方でもいらっしやいますのね。パウル兄様みたいに。」

最後の一言で、再び、先程の名状しがたい想いが、ビットンフェルトの胸を刺した。今度は先程

より、強く深く胸が疼くのを、ビットンフェルトは感じた。

ビットンフェルト上級大将の様子が変だ

軍の中でそういう風評が立ったのは八月に入ってからであった。

オーベルシュタイン元帥の葬儀前は、皆、それ程、ビットンフェルトが、オーベルシュタインの官舎を訪れても、不審に思わなかった。葬儀委員長としてはもっともな事と思い、感心もしたのである。その筆頭はワーレンであった。

「あのオーベルシュタインの為に、あのビットンフェルトが、お役目とはいえ、よくもまあ我慢しているものだ。」

と、ワーレンは、ミュラーに向かって述べた。二人はハイネセンで、オーベルシュタインとビットンフェルトの間に立って苦勞させられていたので、他の僚友達以上に、事の成り行きに驚いたのである。

また、オーベルシュタインの従姉妹の為に軍務

省や財務省に掛け合っ、遺族年金が受け取れるようにしてやったという話を聞いた時も、僚友達はビットンフェルトらしい義侠心の表れと受け取った。

然し、ビットンフェルトが、オーベルシュタインの埋葬の為に惑星オーディンまで行くと言いつ出した時は、大多数の者が首をひねった。

「てつきり、フェザーン宇宙港までオーベルシュタインの遺体を送り届けたら、御役御免と喜んでかき消えるに違いないと踏んでいたのだが……。」
これは、ケスラーの感想であった。彼は、おそらく誰も同行を望まぬであろうオーベルシュタインの葬列をオーディンまで送り届けるのは、士官学校の同期生たる自分の責務となるのではないかと密かに覚悟していたのだが、その覚悟は無駄となった。

ミッターマイヤーは、この件に関して、

「オーベルシュタインは、カモフラージュに使われたのだろう。ビットンフェルトの本当の目的は、カイザー皇帝に最後まで同行し、陛下の埋葬に立ち会

うことさ。」

と、バイエルラインに語ったが、オーディンにおけるビットンフェルトの様子を、近衛隊長キスリング准将から知らされ、自分の予想が外れたらしいと悟った。

キスリングの報告によれば、オーディンまでの星路、ビットンフェルトは、自らの旗艦ケーニヒ・ティーゲル「王虎」にオーベルシュタインの遺体とフロイライン・ケストナーを同乗させ、自由になる時間が出ると、寸暇を惜しんでフロイライン・ケストナーの身边にその体を運んでおり、その様子を見ていた従卒の少年は、フロイラインの顔を見なくても、ビットンフェルト提督を見ていれば、フロイラインの表情が分かったという。

更に、オーディン到着後、カイザー皇帝の埋葬を終え、軍務尚書の埋葬を終えた後も、軍務尚書の墓前にたたずむフロイライン・ケストナーの後ろで、ずっと立ち尽くし、決して、フロイライン・ケストナーの警護を人任せにはしなかった、ともつけ加えた。

「ふーん、こいつは、ひよつとすると、ひよつと
するのかな？ ビッテンフェルトが、あのオーベル
シュタインの従姉妹に　　。うーん、だが、ど
うにも、まだ信じられん。ま・さ・か、だ。

なあ、どう思う、エヴァ？」

自宅の居間で、ソファーに浅く腰掛けて、よち
よち歩くフェリックスの両手を支えてやりなが
ら、ミッターマイヤーは愛妻に声を掛けた。夫の
為にいったコーヒーをトレイにのせて、キッチン
から姿を現したエヴァンゼリンは、少し小首を傾
げてから、それに応じた。

「いずれにしても、周囲がどうこう言うことでは
ありませんわ、きつと。それに、ウォルフ、ビッ
テンフェルト提督は、御自分の感情を隠しておけ
る方ではありませんもの。本当にあなたの考えて
いらっしやるとおりなら、すぐに判りますわ。
ね？ フェリックス？」

エヴァンゼリンは、共和政府のキャゼルヌ夫人
の様な予言者としての名声をこれまで得たこと

はなかったが、今回の件では、彼女の言葉は日ならずして真実となった。

九月一四日に、ビットンフェルト達が惑星オーディンから帰還すると、噂は噂ではなく真実として広まり始めた。舞台となったのは、高級士官クラブ ゼー・アドラー 海鷲 であった。

まず、ビットンフェルトは ゼー・アドラー 海鷲 で、久しぶりに会った僚友達に片っ端から、

「美味しい肉屋を知らないか？」

と尋ねて回ったのである。

「なんだ、ビットンフェルト、オーディンの肉はそんなに不味かったのか？」

と声を掛けたミッターマイヤーの姿を認めると、ビットンフェルトはミッターマイヤーの隣の席に腰を降ろして言った。

「いや、そうではない。オーディンから帰ってみたら、オーベルシュタインの犬が弱っていてな。

食欲も無いようなのだ。それで、少しでも美味しい鳥肉を喰わせてやろうと思ったのだが、何分、俺

はこれまで自分で肉屋へ行つたことがないので、何処の店がいいのか判らなくて。そうだ、元帥、卿の奥方は料理上手だし、いい肉屋も御存じだろう？聞いて来て貰えんだろうか？」

(こいつは本物だな。)

と、ミッターマイヤーは一歳年長の僚友の真剣な顔を微笑ましく思い、必ず聞いて来てやるからと答えて席を離れた。

ゼー・アドラー

海鷲の出口の所で振り返

つてみると、ビッテンフェルトは、今度はアイゼナツハをつかまえて同じ質問を繰り返しているところであつた。アイゼナツハは、半ば呆れたような顔でビッテンフェルトの話を聞いていたが、何回か頷いてから、ミッターマイヤーの方へ逃げてきた。そして、ミッターマイヤーと顔を見合わせる、両手を横に広げてかぶりを振り、店を出て行つた。

ゼー・アドラー

次の日も、ミッターマイヤーは海鷲に立ち寄つた。ミュラーやビュロー、バイエルラインも一緒である。メックリングーも後から来るはずであつた。

既に店の片隅にビッテンフェルトが座っていた。誰かを待っているらしい。一〇分程するとアイゼナツハが店に現れた。アイゼナツハは、ビッテンフェルトの席に歩み寄ると、軍服のポケットから小さな紙切れを取り出し、立ったままでビッテンフェルトに手渡した。そのままくると向きを変え離れようとするのを、ビッテンフェルトは手首を掴んで止めた。

「待てよ、アイゼナツハ。肉屋の地図、有り難く頂いておく。礼と言っては何だが、今日は俺がおぐるから、ちょっと付き合え。」

(可哀想に、アイゼナツハの奴、ビッテンフェルトにつかまったな。これはしばらく帰れまい。) ミッターマイヤーは、アイゼナツハの迷惑そうな顔を見て心底同情した。

おそらくビッテンフェルトは、口の堅いアイゼナツハ相手なら何を話しても大丈夫と踏んだのだろう。これまでにラーベナルトから聞いた話や、エリザベートとのやり取りを詳しく再現し始めた。室内隅々まで聞こえる大声で……。もし、

オーベルシュタインが生きてあれば、自分の私生活がこうもあからさまにされるのを決して許さなかつたに違いない。

「とまあ、これがオーベルシュタインの執事から聞いた、あの二人の関係だ。意外だろう？オーベルシュタインにも人間らしい感情があったなんて。卿はオーベルシュタインの犬の話を知っているか？まだオーディンが首都星だった頃、奴が元帥府の前で拾ったっていう、あの犬だ。あれは、二〇年前、フロイライン・ケストナーの家で飼われていた犬と同じ犬種なんだそう。もし、違う犬種だったら、オーベルシュタインの奴は知らん振りして通り過ぎちまつたに違いない。何でもその犬は、二〇年前の事件で、フロイラインを守ろうとして殺されちまつたそう。で、あの犬を家に連れて帰ったんだが、オーベルシュタインは犬に名前をどうとう付けなかつたそう。二〇年前に死んだ犬の名前が、どうしても思い出せないと。どんな名前だつて構わんと、俺なんかは思うのだが。アイゼ

ナツハ、卿はどう思う？フロイラインの話では、あの犬は少なくとも一八歳以上だそうで、人間なら一〇〇歳を越えてるってことだ。フロイラインは、名前が付いていなくても別に不便はないし、あの犬にも長い間親しんだ名前があった筈で、あんなに年を取ってから急に別の名前で呼ばれても犬の方で迷惑かも知れないって言っていた。どうだ？冷静かつ優しい意見とは思わんか？むしろ不思議なのはオーベルシュタインの方さ。犬の名前のことぐらいで、妙に感傷的だろう？どうもあいつは、フロイラインにかかわるものを見るときは義眼を取り替えていたようだ。ロマンチック・カラーの義眼にな。それから信じられるか？フロイラインがああ晩、オーベルシュタインに歌っていた子守歌は、オーベルシュタインがフロイラインによく歌ってやっていた歌なのだそう。フロイラインは事件以来、どうも雷が苦手らしくてな。夜、雷が鳴り出すと、オーベルシュタインの部屋へ枕を持って逃げて行ったらしい。で、その時にオーベルシュタインがフロイラ

インに歌ってくれたのが、あの歌だったっていう訳だ。 何だ!?! アイゼナツハ!?! その眼は? 卿

は疑っているのか? フロイラインとオーベルシユタインの仲を? . . . まあ、俺も初めて聞いた時は驚いたからな。 あいつとフロイラインが並んで寝ている姿なんて、気持ち悪いじゃないか? そうだろう? でも、この話を俺にしてくれたのはフロイライン自身なんだ。 もし、そんな間柄だったら、こんな話、逆にしてくれないだろう? どうだ?」

左手で頬杖を突き、右手の人差し指でテーブルを叩きながらビッテンフェルトの話を聞いていたアイゼナツハだったが、ここまで来たとき、右手をビッテンフェルトの手に重ね、周りを見るように眼で促した。

ゼー・アドラー

海鷲 中の人間が、全員、自分の方を見ていることに気付いて、ビッテンフェルトは立ち上がった。

「な . . . 」

戸惑ったような表情の後で、ビッテンフェルトの

顔は突然紅潮し、続いて蒼白になった。

「 帰る。」

低い声でこれだけ言つと、ビッテンフェルトはテーブルや椅子を弾きとばしながら部屋の中を移動し、ドアに悲鳴を上げさせて他の者達の視界から去つていった。

ゼー・アドラー

入れ替わりに海鷲 に入ってきたメックリングーに、ミッターマイヤーが声を掛けた。

「メックリングー、惜しいことをしたな。もう少し早ければ卿も興味深いものを見られたのに。」

「いや、だいたい判りますよ。ドアの外までビッテンフェルト提督の声は聞こえていましたからな、元帥。それにしても、彼ほどロマンスという言葉の似合わない男も珍しい。古今東西のどんな芸術家でも、彼の恋をロマンチックに表現するとは叶いますまい。恋する相手の許へ鳥肉を抱えて通う男など、彼ぐらいのもですよ。それともビッテンフェルトは自分の気持ちに、まだ気付いていないのでしょうか？」

そんなところだろう、とメックリングーに同意

すると、ミッターマイヤーは腕を組んで眼をつぶった。九年近く前、彼も今のビッテンフェルトと同じ様な状態にあった。然し彼は、自分の気持ちを知っていた。判らなかつたのは、それを相手にどうやって伝えたら一番良いかという事だけだった。

でも、俺の方が奴よりは洗練されていたようだな、と思う。女の扱いに長けていた親友がここにいたら、ビッテンフェルトにどんな助言をするだろう？ いや、だめだ。あいつの助言なんて、ビッテンフェルトの役には立つまい。それにしても、相手の女性の気持ちはどうなのだろう。何とかしてやりたいが……。

ここまで思いを巡らすと、ミッターマイヤーは灰色の瞳を開き、部屋の中にいた者達に今夜のことは口外無用と厳命した。

新帝国暦 三年（宇宙暦八一年）、九月一

八日、皇太后ヒルデガルドは先帝ラインハルトの遺言により、ナイトハルト・ミュラー、フリッツ・

ヨーゼフ・ビッテンフェルト、エルネスト・メックリンガー、アウグスト・ザムエル・ワーレン、エルンスト・フォン・アイゼナツハ、ウルリッヒ・ケスラー、この六名の上級大将を帝国元帥に叙した。ウォルフガング・ミッターマイヤーは帝国首席元帥の称号を受けた。獅子の泉の七元帥ルヴェンブルンの誕生である。

同時に人事の異動も発表された。国務尚書マリンドルフ伯はその地位を辞し、ミッターマイヤーがその後任に選ばれた。彼は最初それを固辞したが、皇太后ヒルダから再三にわたる説得を受け、遂に首を縦に振ったのであった。軍の最高首脳が国務尚書を務めるといふ点からも、ローエングラム王朝初期の軍事政権としての性格がつかえるが、これはこの時期、やむを得ないことであつたかも知れない。長年の戦乱により、優秀な人材は殆ど軍部に流れており、この点では惑星ハイネセンも似たような状況であつた。

ミッターマイヤーの後を受けて帝国艦隊総司令官にはミュラー元帥が、オーベルシュタインの

死後、空席になっていた軍務尚書にはメックリンガー元帥が、それぞれ就くこととなった。

また、共和政府から明け渡されるイゼルローン要塞には、司令官としてワーレン元帥が入ることとなった。この人事には、実は少しばかりワーレンに対するヒルダの配慮があった。ワーレンは妻を失って後、一人息子を自分の両親に預けており、既に六年近くも殆ど会えない状態であった。ヒルダもこの辺りの事情を熟知しており、安心して民間人でも居住できつるイゼルローンにワーレンを送り、息子と両親の三人を呼び寄せるよう取り計らったのである。

翌九月一九日、生後三カ月半のアレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエングラムは、ローエングラム王朝第二代皇帝として至尊の冠をその頭上に戴く事となった。母親たる皇太后ヒルデガルド・フォン・ローエングラムの腕の中で皇帝アレクは、その青玉色の瞳を辺りに巡らせた。七元帥をはじめとする政府高官、そしてミッターマイヤー夫人に手を握られて立っている一歳年

長のフェリックス・ミッターマイヤーの姿が眼に映った。彼らと未だアレクの瞳に姿を映さぬ多くの人々が、アレクの為に力を貸してくれる筈である。人類史上最大の帝国をより良き姿に作り上げていく為に。

戴冠式の翌日、ビットンフェルトは元帥となつてから初めてオーベルシュタイン邸を訪れた。

ゼー・アドラー

海鷲で、アイゼナツハ相手にオーベルシュタインやエリザベートの話をしていたつもりが、室内のもの全員に聞かれていたと知り、慌てて店を飛び出したあの日以来、エリザベートに会っていない。もう四日になる。こんなにエリザベートに会わずに過ごしたのは、七月二七日の未明にオーベルシュタイン邸を訪れて以来初めてのことであった。

ラーベナルトからビットンフェルトの来訪を伝えられたエリザベートが、居間からドレスの裾をひるがえして迎えに出て来た。その顔はビットンフェルトを心から歓迎している旨を伝えてい

た。

「ああ、ビットンフェルト閣下、よくおいで下さいました。元帥就任おめでとございます。私、少しでも早くお祝いを申し上げたくてたまらなかつたのですよ。」

「ありがとうございます、フロイライン。でも、あなたの従兄弟は皇帝ラインハルト陛下から元帥杖を下賜されたが、私はそうではありません。私は元帥にして頂く程の功績は何も挙げておりませんし、平和を迎えた今となっては、これから挙げることも叶わぬでしょう。私には元帥杖は重すぎます。」

「そんなことはありません。平和な時代には平和な時代の武人の務めがございます。少しでも平和な時代が長く続くように守るのも大切な事ですもの。むしろ、その方が難しいかも知れません。それに武人としてばかりでなく、一人の人間として、閣下はローエングラム王朝になくてはならない方ですわ。これまでも、これからも……。」

ビットンフェルトは元帥杖を皇太后から手渡

された時より、エリザベートの言葉を聞いた今の方が、胸が高鳴るのを感じた。

「フロイライン、今の貴女の御言葉、小官は決して忘れません。平和な時代の武人の務め、武人としてだけではなく一人の人間としての私。そうだ、そうですとも。自分の力を全て使って、私は皇帝ラインハルト陛下の築き給うた世界を守ってみせます。」

それだけ言うと、ビットンフェルトは持って来た包みのことを思い出してエリザベートに差し出した。

「これを犬に。ミッターマイヤー夫人お薦めの店で手に入れて来ました。鳥肉です。」

「まあ、こんなに沢山　　ありがとうございます。先日も頂いたのにすみません。少し失礼してよろしいですか？お肉を冷蔵庫に入れてきますわ。ラーベナルト、ビットンフェルト閣下を居間にお通しして頂戴。あの・・・先客がいらっしやるのですけれど、構いませんわよね？」

エリザベートの言葉に、ビットンフェルトは怪訝

そんな顔をした。この家で彼以外の客になど、今まで会ったことがなかった。そんなビッテンフェルトの表情を認めてエリザベートの顔が心配そうに曇った。

「ケスラー元帥なのですけれども 別室の

方がよろしいでしょうか？」

「いや、構いません、私は……。」

どうしてケスラーが来ているのかなどと、エリザベートに尋ねるのは、何となくためらわれて、ビッテンフェルトはラーベナルトの方へ顔を向けた。エリザベートは、それを見て安心したように微笑み、厨房のある方へと去って行った。その後ろ姿を見送りながら、ビッテンフェルトはラーベナルトに声を掛けた。

「おい、ケスラーの奴はよく来るのか？」

「いいえ、今日が初めてでございます。」

老執事の答えに、ビッテンフェルトは強張っていた顔の筋肉から力が抜けるのを感じた。

「何だ、そうか、今日が初めてか。で、何の用で来たのだ？」

「何でも、皇太后様からの御伝言を頼まれてとの事でしたが・・・詳しくは存じません。そ

れにしましても、エリザベート様は変わられませんでした。何だか生き生きしておいでです。パウル様が亡くなられた時はどうしようかと思っただけですが、閣下がいらっしやるようになって、むしろ以前より明るくなられたように私には見えません。」

「そうか？俺には判らんが、長年みている卿がそう思うのなら、そうかも知れんな。いい事

さ。フロイラインが少しでも元気になってくれれば、オーベルシュタイン元帥も天上で安心でき

ヴァルハラ

るだろう。」

数瞬、遠い眼で壁を見つめてから、ビットェンフェルトはラーベナルトの肩を軽く叩いて居間に入って行くと、つい先刻、ケスラーの訪問を不快に感じた事などすっかり忘れて、ソファアに腰を降りしている僚友に声を掛けた。

「よお、ケスラー元帥、こんな所で会うとはな。

皇太后陛下のお使いだそうだが、一体どうしたん

だ？」

「うむ、ビッテンフェルトか、卿の声は相変わら
ず大きいな。邸内に入ってから卿の台詞は全部
聞こえていたぞ。 皇太后陛下からの御伝言は、

オーベルシュタインの葬儀も終わったし、落ち着
いたら一度仮皇宮にいらっしやいということさ。

フロイライン・ケストナーは、ヴェストパーレ男
爵夫人の学校で皇太后陛下と一緒だったそうで
はないか？まさか、オーベルシュタインの従姉妹
だったとは、皇太后陛下も御存知なかったようだ
がな。 まあ、俺は毎日、仮皇宮に顔を出すし、オ
ーベルシュタインとは士官学校で同期だったと
いう縁もある。それで陛下に頼まれたって訳だ。

安心しろよ、俺はこれで帰るから。」

「おい、卿はまだ用が残っているのではないの
か？用が無いのに長居するような卿ではあるま
いが！さつき、俺の話は全部聞いていたと言った
な？俺が執事に卿のことを尋ねたのが気になっ
ているのか？気にするな、そんなこと。しっかり
用件を済ませてから帰れよ。」

「うむ、実はミッターマイヤー元帥からもフロイラインにひとつ聞いてきて欲しいと頼まれたことがあったのだが、さっきの会話で判ったからもういい。そうだ、ビッテンフェルト、卿と少し話したい事がある。俺の地上車はもう返してしまっただし、卿の地上車で送って貰えんか？」

「えっ、ランド・カー ここでは話せない事なのか？俺は今来たところだぞ。」

ビッテンフェルトは抗議の意を込めてケスラーに答えた。

「判っているさ。そんなに遠くまでではない。俺を送り届けたら、もう一度戻ってくれば良いではないか。時間はあるのだろうか？」

「それはそうだが……。」

二人の元帥が地上車ランド・カーの使用をめぐって押し問答をしているところへ、エリザベートが入ってきた。

「あら、どうなさったのですか？」

ケスラーが答えた。

「フロイライン、申し訳ありませんが、小官はこ

れで失礼致します。ビットンフェルト元帥が
地上車ランド・カーで送ってくれるそうです。」

「おい、ケスラー、俺はまだ承知しておらんぞ！」
エリザベートも懇願するように言った。

「あの・・・美味しいお肉が沢山あったので、今
フリカッセを作っているのです。どうか、それを
召し上がってからお帰り下さい。もうすぐ出来上
がりますから・・・。ワインも冷やしてあります
し・・・。」

「いや、フロイライン、実は今夜は約束があります
して、食事もそちらで取る事になっているのです。
御心配には及びません。ビットンフェルトはすぐ
にこちらへ返します。どうか、私の分もビットン
フェルトに喰わせてやって下さい。」
ケスラーのこの言葉を聞いて、ビットンフェルト
は僚友の言うことを聞いてやることにした。

ランド・カー
地上車の中で先に口火を切ったのはビットン
フェルトであった。

「さあ、ケスラー、話というのは何だ？早く言

え。」

「うむ、 ビッテンフェルト、卿はさつき、俺がフロイライン・ケストナーを訪ねたと知ってどう感じた？何を考えた？正直に言ってみる。」

「えっ、何をって・・・うーん、そうだな、怒るなよ、ケスラー。正直言つて俺は面白くなかった。卿とフロイラインが、どんな関係なのか気になった。そして、そんな自分に気が付いて腹が立った。そんなところだ。」

「そうか・・・自分に腹が立った、か・・・卿は本当にいい奴だな。」

「何だ、気味が悪いな。誉めても何も出ないぞ。」

「卿は自分の気持ちに気付いているか？」

「何？どういう意味だ？」

「どうして面白くなかったか、どうして俺とフロイラインの関係なんか気がなったか、その訳だ。」

「訳だと？」

「そうだ。卿の感じたものを人がなんと呼ぶか知っているか？そいつは、嫉妬、というんだ。」

「嫉妬だと！馬鹿言え。何で俺が卿に嫉妬するんだ？」

「それは、卿がフロイライン・エリザベート・フオン・ケストナーに恋しているからさ。」

ケスラーのこの言葉は、ビッテンフェルトに取って思いがけないものであった。

「・・・恋？・・・恋だと？この、この俺がか？き、貴様、何抜かす！！言わせておけばいい気になりやがって！！」

ランド・カー

ビッテンフェルトは、地上車の中だということも忘れてケスラーにつかみ掛かるうとしたが、ケスラーはビッテンフェルトの手首をひねり上げ、もう一度ビッテンフェルトを座席に座らせた。

「そうだ、恋だ。卿は今、恋をしている。」

「馬鹿な！何でこの俺が恋などするか！そんな女々しいこと、考えたこともない！！」

今度はケスラーが驚く番であった。

「ビッテンフェルト、卿、今、何と言った？恋

愛は女々しい、そう言っつのか、卿は？」

「当たり前だ！！」

「成る程な。そう考えていたのでは、自分の気持ちに気付かぬのも無理はない。」

こう言ってケスラーは嘆息した。それからビットェンフェルトの方に向き直り、しっかりと顔を見つめると再び口を開いた。

「ロイエンタールは恋多き男だった。あいつを女々しいと思うか？」

「ふん、ロイエンタールは恋愛なんかしたことは一度だって無かった。俺はあいつを士官学校の時から知っている。あいつのしていたのはな、恋愛ではなくて漁色というのだ！」

「では、ミッターマイヤー元帥はどうだ？元帥は夫人に7年間恋い焦がれた末に求婚した。今でも夫人に恋し続けている。女々しいと思うか？」

「……いや、思わない。」

「それ見る。なあ、ビットェンフェルト、恋愛それ自体は決して女々しいものではない。問題となるのはどんな恋愛をするかだ。ビットェンフェルト、いい恋愛をしろ、卿らしい恋愛を。その恋が実を

結ぼうと結ぶまいと、後から振り返って自らに恥
じることのない恋をするんだ。俺が卿に言いたか
ったのはそれだけだ。 あっ、ここがいい、
降ろしてくれ。」

ケスラーはレストランやカフェが立ち並ぶ繁
華街の二画に、ランド・カー地上車を止めさせた。ランド・カー地上車から
降り、ドアを閉めながら、ビットンフェルトにも
う一度声を掛けた。

「いいか、フロイラインの所へ必ずもどるんだぞ。
フリカッセが冷めないうちだ。いいな？俺のこ
とを嘘つきにはせんでくれよ。・・・ビットンフ
エルト、いい恋をしような。」

ランド・カー地上車のドアが閉まり反対方向へＵターンし
てから、ビットンフェルトは今のケスラーの言葉
を反芻した。

（いい恋を、し・よ・う・な、だと？）
思わずリア・ウィンドー越しにケスラーを見ると、
謹言実直な憲兵総監は、こちらに向かつて手を振
っていた。お義理に手を振り返して前に向き直る
うとしたビットンフェルトは、

「大佐さーん!!」

と叫びながら前方より駆けて来た黒髪の少女と、サイド・ウインドー越しにすれ違った。その顔にビットンフェルトは確かに見覚えがあったのだが、どこで会い、何という名前だったか、遂に思い出せなかった。

ケスラーと別れ、オーベルシュタイン邸へ戻る途中、ビットンフェルトはずっとケスラーの言葉を思い出していた。自分が恋をしているというのは、にわかには信じられない事であった。彼はこれまで、ケスラーに述べたとおり、恋愛は自分に相応しくない行為であると信じ行動してきたのである。

けれども、決して女性と関係が無かったわけではない。士官学校の学生だった頃から、度々、悪友達と乱痴気騒ぎを起こし、朝、見ず知らずの女性　おそらく前夜の酒場にいた女性のうちの一人　のベッドで目を覚ました事も一度や二度ではなかった。そんな行状を眉をひそめて

見る者も上官の中には多かった。帝国軍士官たる者、もつと品位ある行動を　　というのである。然し、逆に下士官以下の者達からは好かれた。上品ぶらず、自分たちと一緒に騒ぐ陽気で豪快な若き士官は、彼らの代表としての地位を確立していったのである。獅子帝ラインハルトとその麾下の将帥の中で、ビッテンフェルトは、皇帝自身と双璧の次に、鉄壁ミュラーと並んで兵士達に人気のある指揮官であった。

ビッテンフェルト自身、そんな自分のありようを是としてきたし、変えたいと思ったことなどなかった。同期のロイエンタールや一期下のミッターマイヤーが、攻守ともに優れた名将として名を成し、自分の遙か前方を歩むことになっても、二人の将才を高く評価しこそすれ、二人の真似をしようと思ったことはない。あいつらはいいつら、俺は俺という気持ちが強かった。

だが、今、ビッテンフェルトは急に不安を感じ始めていた。女性に恋することにより、自分がこれまででの自分ではなくなってしまうのではない

かという不安であった。

そんな畏れにも似た感情を胸に抱いたまま、ビットェンフェルトは再びオーベルシュタイン邸の門をくぐり、エリザベートやラーベナルトの歓迎を受けた。あの犬さえ、暖炉の前で身を起こし、尻尾を振ってみせてくれた。

白ワインとフリカッセ、チシャのサラダの並べられた食卓に案内されたビットェンフェルトは、どのような状況においてもその影響を受け付けない鉄の胃袋に、グラスと皿の中のを次々に放り込んでいった。その健啖ぶりに驚きながらも、エリザベートは嬉しそうに、おかわりを彼によさうに、幾度も厨房と食堂の間を往復した。

何度目かの給仕の後、エリザベートは申し訳なさそうにビットェンフェルトに言った。

「御免なさい、これで最後なんです。もし、まだ足りないようでしたら、何か別のものを用意しますけれど……いかがですか？」

「いや、もう結構、十分過ぎるほどです。いやあ、

フロイラインは料理の達人でいらっしやる。こんなに美味しいフリカッセはミッターマイヤー元帥の家で食べて以来です。毎日、こんなに美味しいものをたっぷり喰っていたのに、どうしてオーベルシュタインの奴はあんなに顔色が悪かったのだろうか？」

言ってしまったからビッテンフェルトはしまったと思っただ。

（従兄弟の悪口と受け取られなかっただろうか？）

然し、エリザベートはそうとは受け取らなかったようであった。彼女は彼女にしては珍しく、ばつこの悪そうな顔をして、こう答えた。

「あの・・・パウル兄様は、私の作った料理を食べたことなど一度もありませんの。これまで、自分の部屋に閉じこもっていることが多くて、お料理を作ることなどありませんでしたから。このフリカッセも白状しますと、今日初めて作ったのです、本を見ながら、ラーベナルト夫人にも教えてもらって・・・。お口に合わなかったらどうし

ようかと心配だったのですけれども、喜んで頂けて、とても嬉しいですね、閣下。」

「初めてって　では私が最初なのですか？
フロイラインの手料理にありついたのは？」

「ええ・・・ええ、そうなりますわね。」

「フロイライン、先程、私はフロイラインを料理の達人と申し上げましたが、訂正します。フロイラインは料理の天才でいらっしやる。」

ビットンフェルトは胸の中で何かが飛び跳ねているような、くすぐったい感じを感じながら、改めてエリザベートの料理の腕を称賛した。この感じ、これも恋の症状なのかも知れないな、本当に俺がフロイラインに恋しているのなら、エリザベートの嬉しそうな笑顔を見ながら、ビットンフェルトの頭をそんな考えがかすめて行った。

数時間後、ビットンフェルトは、宿舎となっているホテルの一室で、ベッドの上に仰向けになっていた。彼が見据えていたのは天井ではなく、自

分自身の気持ちだった。

（もし俺が、ケスラーの言つとおりフロイライ
ン・ケストナーに恋愛感情を抱いているとしたら、
それによって俺が俺でなくなるということはな
いだろうか？現にここの所、俺は今までに経験し
たことの無い気分何度々おそわれている。今日な
ど、ケスラーにどうも嫉妬したらしい。フロイラ
インに二度と会わずにおいたらどうだ？いや、四
日間会わなかっただけで、あんなに空虚な気分を
味わったのだ。ぼーっとしている俺など、俺では
ない。ああ、もう、分からん！）

元々、ビッテンフェルトは一人で考え込むのは
得意な方ではない。彼の思考は、どちらかと言え
ば極めて直感的なもので、一瞬の決断を迫られる
ような場合には凡人の遠く及ばない処のものな
のだが、ひとたび袋小路に迷い込み熟慮を必要と
する局面に陥ると、一人で考えをまとめるのは至
難の技であった。このような時、彼は自分の幕僚
たちと意見を交換しながら、自らの頭の中にある
おぼろげな思考を実体化することが多かった。良

い話し相手があれば、ビットンフェルトは自分の思考力や想像力を何倍にも増幅可能であった。戦闘においては、その聞き手は黒色槍騎兵艦隊副司令官ハルバーシュタット大將や参謀長グレーブナー大將でもよかったのだが、今回のような問題では、彼らは、はっきり言って当てにならないなかつた。

(あいつしかおるまい。)

ビットンフェルトは部下の中で最も優秀な増幅装置である男を呼ぶことにきめてから、眠りに落ちたのである。

次の日、副参謀長オイゲン少將はビットンフェルトから執務室まで来るよう命じられた。オイゲンが部屋に入って行くと、ビットンフェルトは従卒の少年に他の者は誰も入室させないよう命じて、それから思い出したように付け加えた。

「お前にも自由時間をやろう。一時間位、外へ行って羽を伸ばしてこい。二時間でも構わんぞ。そつだ、小遣いをやるから何か美味しいものでも食つて来るといい。」

顔を輝かせて飛び出していく少年を見送ってから、ビットンフェルトはオイゲンにソファーに腰掛けるよう指示し、自分も執務席の椅子に深々と腰を下ろした。

「なあ、オイゲン」

「はっ、何でありましょうか、閣下。」

「卿はどう思う？ケスラー元帥によれば、俺は今、恋をしているのだそうだ。」

「フロイライン・ケストナーのことでございますか？」

「何故知っているのだ？」

「それはもう。恐れながら、小官ばかりでなく、艦隊の者は全員存じております。おそらくは他の部隊の者も。」

「他の部隊の連中もだと？」

ゼー・アドラー

「はい、海鷲での一件はミッターマイヤー元帥が箝口令を敷かれたにもかかわらず、全軍に知れておりますので。」

ビットンフェルトは嘆息した。

「やれやれ、知らなかったのは俺だけか。間抜け

以外のなにもものでもないな。」

「けれども閣下、閣下がフロイライン・ケストナーにお心を配られたのは当然です。保護者を失って傷心の女性に冷淡に接するような輩は、男の風上にも置けません。その点、閣下の態度は実に御立派でいらつしやいました。小官は閣下の下で働けることを誇りに思っております。また、フロイラインも閣下の御厚意を受けるに相応しい女性とお見受け致しました。今回のオーディン行きに同行致しております将兵の中で、お二人のお姿を好意的に見ない者などおりませんまい。」

それを聞いて、ビットンフェルトは自分がまだ兵士達の信頼を得ていることを知り、最大の懸念を払拭する事が出来た。

「オイゲン、俺はこれからどうしたらよいと思
う？」

「ここが肝心なところだとビットンフェルトは思った。だが、オイゲンの返答はあっけない程、簡単であった。

「これまでどおりでよろしいではありません

か？」

「これまでどおり、だと？」

「そうですね、閣下。これまでどおり、フロイラインのお力になって差し上げればよろしいではありませんか？フロイラインは閣下のような方の助けをまだ必要としておられます。閣下もそんなフロイラインを放ってはおけませんまい。恋だの愛だのはこの際考えず、これまでどおりのお付き合いを続けられるが良いかと小官は考えます。言いたい者には言わせておけばよろしいではありませんか。」

このオイゲンの進言はビットンフェルトの心を軽くした。そうだ、俺は俺だ。他の奴らが何を言おうが構わんではないか。今までどおりの俺で行こう。もう、迷いはなかった。

オイゲンの進言を受けたあの日以来、ビットンフェルトは堂々とエリザベートを訪ね、僚友達にその事を揶揄されても堂々と受け流し、ミッターマイヤーに言わせれば、堂々とのろけるようにな

った。いかにもビッテンフェルトらしく。

ただ彼自身には自覚が無かったかも知れないが、周囲の者にはビッテンフェルトが少しずつ変わっていくように思われた。彼はオーベルシュタイン邸にエリザベートを訪ねるだけではなく、彼女を外へ連れ出すようになった。エリザベートが喜びそうな場所をラーベナルトから聞き出すと、まるでいたずらを企む少年のように秘密裡に計画を立て、突然エリザベートを邸外へさらって行くのである。そして、その「場所」の多くが、いかにもビッテンフェルトに似つかわしくないのであった。いつの間にか、オレンジ色の髪のエリートと純白の髪のお嬢さんの姿は、音楽会の常連になっていた。もっとも元帥の方は演奏の間、ずっと夢の小舟を漕いでいるというもっぱらの評判であったが……。彼らと度々音楽会の会場で顔を合わせたメックリンガー元帥は、ヴェストパーレ男爵夫人に書簡の中でこのように述べている。

「全く芸術とは無縁にみえたビッテンフェルト元帥が、このような場所へ自ら望んで足を運ぶ日

が来ようとは考えてもおりませんでした。しかも彼はいびきをかかなくなりました。まさしくこれは芸術の女神の為せる奇跡と申せましょう。」

変わったのはビッテンフェルトだけではなかった。エリザベートもビッテンフェルトに引きずられる形で変身せざるを得なかったのである。

ビッテンフェルトはエリザベートを傷病兵のためのチャリティー・コンサートで歌うように仕向けた。

「フロイライン、貴女の従兄弟、オーベルシュタイン元帥は軍の重鎮だった。縁者である貴女にも傷病兵達の為に何かする義務があると思うのだが……どうだ？一曲歌ってみては？」

一度だけならと覚悟を決めて舞台上上がった彼女だったが、一度が二度、二度が三度になり、いっしか彼女は、こういった催しの運営にまで名を連ねる事になってしまった。

またビッテンフェルトは、

「皇太后陛下がフロイラインにお会いになりました。いそうだ。」

と言つて、度々エリザベートをヒルダの許へ連れて行つた。初めてヴェルゼーデ仮皇宮にエリザベートが参内し、ヒルダと何年かぶりの再会をした時、ヒルダはエリザベートに向かつてこう言つた。

「しばらくね、フロイライン・ケストナー。貴女がオーベルシュタイン元帥の従姉妹だつたなんて驚きました。覚えていますよ。学校で、他の人達が宝石や服や花や馬の話をしている時、貴女はいつも本を読んでいたわね。貸し出しカードに貴女と私の名前しか書いてない本が図書館に何冊あつたことが。学校ではあまりお話をする機会がありませんでしたけれども、これからは時々一緒に時間をもちたいと思つているの。承知して頂けるでしょうか？アレクに対等な友人が必要なように、私にも立場を離れた友人が何人か必要なのです。ハイネセンにも一人います。フレデリカというの。主義・主張は違ふけれども素敵なひとです。直接会う機会がなかなか無いのが残念ですけれども、F.T.L超光速通信で時々話しているのですよ。そんな友人に、出来れば貴女にもなつて頂

きたいのです。お願いできますか？」

こうして、エリザベートはヒルダの話し相手も務めることになってしまった。そして、この事が歴史にいくらかの影響を与えることになる。後世の歴史家は言う。

「エリザベートとの会話から、皇太后ヒルダは幾つかの政策を立案した。その多くは生活レベルの細かな問題に関わるものであった。それが実際に施行された時には、それ程人民の生活に大きな変化があつたようには見えなかつたが、幾年かの歳月を経て、国民は二人の女性の識見の確かさに感謝する事となつた。」

尚、エリザベートのこの変化は、後世の心理学者や教育者達にとつても興味深いものであつたらしく、何人かの人物が彼女について書いている。彼らが一致して述べているのは、エリザベートの能力が発揮されるにはビッテンフェルト元帥の存在が必要であつたという点である。ただ、ここで問題となるのはオーベルシュタイン元帥の存在である。彼に対する評価は幾つかに分かれてい

る。

ある者は言う。

「オーベルシュタインが生きていれば、エリザベートはビッテンフェルトを必要としなかったであろう。おそらく賢明なる年長の従兄弟に導かれ、同じ結果を得られたに違いない。」

また、別のある者は言う。

「オーベルシュタインは、むしろエリザベートにとって、少なくとも不幸な事件の直後以外は有害であったのではないか。彼の存在はエリザベートを過度に保護し、社会と隔絶させる方向に働いていたのではないか。その為にエリザベートは四歳の折りの不幸な事件から立ち直るのが遅れたのである。」

更に別の研究者はこう述べている。

「エリザベートは最も理想的な二人の保護者の連携によって作り出された奇跡の人である。四歳から二四歳の夏までのエリザベートに必要なだったのは、オーベルシュタインのような人物の細心の注意を払った精神的ケアであり、それによって

エリザベートの精神は従兄弟の死亡時、既に十分な修復が気付かぬうちに完了されていた。それを彼女に気付かせ、更に活性化させたのがビッテンフェルトであった。」

いずれにしても、エリザベートにとって、傑出した人物が何名も周囲に存在していたという事は幸運以外の何者でもなかった。

新帝国暦 四年（宇宙暦八 二年）の晩秋、
ビッテンフェルト元帥は数日間にあわただしく機嫌が悪く、部下達は気を遣うこと甚だしかった。

オイゲン中將にはその理由が判っていた。ビッテンフェルト元帥が停滞性低気圧と化したその日、フロイライン・ケストナーがビッテンフェルトにオーベルシュタイン元帥の遺言の執行も全て終了したので、年内にもオーディンへ去る旨を伝えたのである。

「フ、フロイライン、何もオーディンに行かずともよいのではないか？ 皇太后陛下も寂しがられようし……。」

「いいえ、そう言う訳にも参りません。今の住まいは官舎です。御厚意でパウル兄様の死後も住まわせて頂きましたが、いつまでもそれに甘える訳には参りません。ヒルダ様とは、手紙でも、^{F.T.L}超光速通信でも連絡できますわ。」

「だが、官舎を出ねばならぬにしても、どこか別の住まいに移れば済むではないか？」

「ええ　でも、オーデインに家があるのですから。私の場合、どうしてもフェザンに住まねばならない訳ではありませんもの。フェザンで家を買ったり、借りたりするのは無駄になります。」

「経済的なことなら、俺がなんとかしてもいい。」
この言葉にエリザベートは誇りを傷つけられたようであった。

「だめです、そんなこと。そこまで閣下面倒を見て頂く理由はありません。それに、お金のことなら閣下のお陰でパウル兄様の遺族年金も頂けるようになりましたし、何の心配も無いのです。」

閣下、閣下にはこの一年あまり、本当に良

くして頂きました。私、幸せでした。閣下がいらっしやるだけで楽しかった。どうか、良い思い出のまま、オーティンへ行かせて下さい。」

「フロイライン、フロイラインは・・・俺と会えなくなっても平気なのか？その方がいいのか？

俺は、俺は・・・」

俺はフロイラインと離れたくない!!そう言いかけてビットンフェルトは言葉を呑み込んだ。あまりに大人げないように思えたからである。然し、胸の中に暗雲が垂れ込め広がっていくのはどうすることも出来なかった。

「もしかしたら俺はフロイラインに嫌われてしまったのだろうか？どうしたら良いと思う？オイゲン？」

翌日、ビットンフェルトは執務室へオイゲンを呼んで前日の様子を語り、助言を求めた。だが今回、オイゲンは即答出来なかった。事態は微妙な状態にあるようであった。オイゲンにはビットンフェルトの気持ちは、自分の気持ちと同じ位判ってい

るつもりであったが、エリザベートの気持ちは、ビッテンフェルトの話から推し量るしかなく、真意がどこにあるのか自信がなかったのである。

あれからもう一週間以上になるが、ビッテンフェルトはエリザベートに一度も会っていないようであるし、オイゲンの知る限り、フロイライン・ケストナーからもビッテンフェルトに何の連絡も無いようであった。オイゲンの目には、彼の上官と純白の髪のお嬢さんは、すでにお互いの存在無しにはあり得ないように映っていた。もしこのままフロイラインが惑星オーディンへ去ってしまうようなことになれば、二人は永遠に自らの半身を失うことになるだろう。

（何とかして差し上げたいものだ。）

オイゲンは、眉間にしわを寄せている上官の顔を見ながらそう思った。

同じ頃、オイゲンと同様にビッテンフェルトとエリザベートのことを気に病んでいる老人がいた。彼はオーベルシュタイン家に元帥の父の代か

ら仕えている執事でラーベナルトという。

ラーベナルトはオイゲンよりも少し詳しく二人の気持ちを知っていた。というより、エリザベートの気持ちを知っていたのである。彼は常にエリザベートの近くにあつて、その様子を幼い頃より見てきたので、僅かな挙動の変化さえも見逃しはしなかった。

彼の見た所、エリザベートは決してオーディンへ帰りたがつてなどいなかった。本当はフェザーンに、いや、あのオレンジ色の髪をした提督の近くに居たいのだ。

然し、彼女の「理性」は

「従兄弟の遺言の執行も終わった以上、官舎を出るべきだ。」

と告げた。

「出て何処へ行くの?」

という彼女の「感情」の質問にも「理性」は無慈悲に答えた。

「フェザーンに居なくてはならない理由が無い以上、オーディンへ帰るべきだ。」

と。エリザベートは、彼女の従兄弟と同様に、感情より理性を優先するタイプの人間であったから、オーティン行きを拒否する正当な理由が見つからぬ限り、「感情」は白旗を挙げる以外なかった。

ビッテンフェルト閣下が、あの時言わずに呑み込んだ言葉を、あのまま続けて言っていたなら、それはきつと「正当な理由」という強大な援軍となつてエリザベートの「感情」に「理性」を屈服させ得たのに・・・と、あの日、ラーベナルトは、肩を落として帰って行くビッテンフェルトを見送りながら思ったものである。

ラーベナルトは、初めてビッテンフェルトと会った頃、実を言つとあまり好意的な目で彼を見ていたわけではなかった。無教養で粗野で騒々しい、彼の亡き主人とは正反対の男に見えたからである。ところが何としたことが、エリザベートはラーベナルトの予想に反してビッテンフェルトを信頼し、彼の亡き主人以外には見せようとしない、つた精神的素顔をビッテンフェルトに見せるよ

うにさえなった。この時点で、ラーベナルトはビツテンフェルトに対する自分の評価を大修正した。彼は亡き主人の、エリザベートを守り幸せにしたい、という想いを知っており、その想いを継ぐ者としてビツテンフェルトを選んだのである。今、彼はビツテンフェルトの恋の最大の協力者であった。

（エリザベート様がオーディンへ立たれる前に何とかしなくては　　）
老執事は思案を巡らせたが、いい考えは出てこなかった。もうあまり時間は残されていない。

ビツテンフェルトの宿舎であるホテルの一室に、ラーベナルトからのＴＶ電話（ワイジホン）が入ったのは、一二月四日の夜のことであった。

「ラーベナルト、一体どうしたのだ？」

「申し訳ありません。私などが直接閣下に連絡を取るなどは失礼な事と思っただのですが・・・。」

「そんなことは構わん。何だ？早く言え。」

「実は閣下には是非来て頂きたいと存じまして

ラーベナルトはやや早口に次のことを話した。

オーベルシュタイン家で飼っている例の犬が、最近益々弱って来ていた。ここ三、四日前からは立って動くことも出来なかったが、それが今朝からいよいよ危ない。午前中に一度獣医に来て貰ったのだが、先程から時折痙攣の発作を起こし始めた。再び往診を請おうとしたが獣医が外出中で連絡が取れない。老犬とはいえ、大きな体なのでエリザベートや自分だけではとても手に負えず、どうか助けて欲しい。エリザベートなど、今朝からパン一切れ、コーヒー一杯口にせず犬に付き添っている。

ここまで話して、ラーベナルトはTV電話の画面の中で向こうの様子をうかがった。

「また痙攣のようです。私も犬のところへ戻って差し上げないと……。どうか、お願い致します。」
画面が消えた。

ビットェンフェルトは腕組みをして、一瞬、何か考えたようであったが、すぐに手に小さな包みを

持つて部屋を飛び出した。

ホテルの外に出ると、空は厚い雲に覆われており、遠くで雷鳴もしていた。

（こいつは嵐になるかも知れんな。）

ランド・カー
地上車を走らせながらビットンフェルトは思った。

二〇分後、ビットンフェルトはオーベルシュタイン邸の玄関の前に立っていた。実に半月振りである。ビットンフェルトの予想通り、天候は悪化の一途をたどり、雷鳴と雨は激しさを増しつつあった。呼び鈴を鳴らした。

（初めて来た日に似ているな。あの日は嵐の後だったが。）

「良く来て下さいました。」

あの日と同じようにラーベナルトがドアを開け、邸内へ招き入れてくれた。かなり疲れているように見える。

「犬は？」

ビットンフェルトが尋ねると、ラーベナルトは無

言で首を横に振った。

「いつだ？」

「先程、閣下ワイジホンにTV電話を差し上げた後、すぐでした。」

「そうか・・・フロイラインはどうしている？」

「あちらの部屋で犬に付いておいでです。」

ラーベナルトが指した部屋からは、あの日ヴェルゼーデ仮皇宮で聞いたのと同じ歌声が聞こえてきた。

「行つて差し上げて下さい・・・お願い致します。」
ラーベナルトに促されて、ビットンフェルトはその部屋に入った。動かなくなった黒と白の斑の体を、エリザベートは優しく撫でていた。ドアの閉まる音でエリザベートは振り返った。

「閣下、どうして？」

「ラーベナルトが知らせてくれた。大変だ

つたと聞いた。すまなかつたな、肝心な時に来てやれなくて。犬は、明日の朝、雨が上がってから俺が埋めてやる。ちゃんと墓を作ってやらないとな。それともオーディンまで連れて

行つて、オーベルシュタインの近くに埋めてやるか？それなら、冷凍保存用のカプセルを手配するが……。」

「……。」

エリザベートの返事が無いのは、彼女がまだその件について決断を下していない為と判断して、ビットェンフェルトは続けた。

「まあ、今すぐ決めなくても大丈夫だ。明日の朝までに決めればいいのだから……。それより、まず何か腹に入れた方がいい。ラーベナルトが心配していた。朝から何も食べていないそうではないか。いかな、そういうのは。どんな時でも、何か食べておかんと体に悪い。」

こう言うと、ビットェンフェルトは持って来た包みを開いて、中のものを出した。

「もつと、気の利いたものと思ったのだが、思いつかなくなつてな。これなら、犬を看ながらでも食えるからと思つて持つて来たのだ。俺の非常食

ケーニヒ・ティーゲル

さ。王虎の艦橋で指揮を執りながら腹が減つた時に、良くこいつをかじるんだ。」

それはボイルしたフランクフルト・ソーセージだった。まだ温かみが残っていた。全く散文的で、実用一点張りの差し入れであったが、エリザベトにはビットンフェルトの不器用な思いやりが、ソーセージの温もりとなっているように感じられた。

「マスタードをたっぷり付けると美味しい。一緒に持って来たから使うといい。」

「ありがとうございます。」

ビットンフェルトが、チューブに入ったマスタードをソーセージにたっぷり付けて、エリザベトに手渡そうとした時だった。すぐ近くに落雷したのだろうか、閃光、それに数分の一瞬遅れて、一際大きな雷鳴が二人を襲った。

「!!」

「!？」

ビットンフェルトは思わずよろめいて、ソーセージとマスタードの容器を取り落とした。エリザベトが軍服にしがみついている。ビットンフェルトは、まるで壊れやすい卵の殻で作られた置物で

も抱えるように、そっと自分の両腕を彼女の背中にまわした。彼女の体が小さく震えているのが判った。

数瞬の後、その震えが収まり、エリザベートは自分が両手でビッテンフェルトの黒と銀の軍服を握りしめていることに気が付いた。

「すみません、取り乱してしまつて。ごめんなさい。」

慌てて体を離そうとしたが、今度はビッテンフェルトの腕がエリザベートを放さなかつた。

先程の落雷による停電で室内の明かりは消え、時折空を駆ける稲妻の光で青白く照らし出されるその一瞬以外は、闇が室内を支配していた。

もし、もっと明るい場所であれば、エリザベートはビッテンフェルトの顔がその髪より濃く朱に染まっていることや、その瞳が決して彼女の顔を見ようとしないこと、唇も何かを語りかけては、すぐに固く結ばれ、何かを逡巡していることに気が付いたに違いない。

然し、殆ど暗闇に近いこの状態では視覚は役に

立たず、エリザベートは視覚以外の感覚が逆に研ぎ澄まされていくのを感じた。

ビッテンフェルトのいつになく不規則で苦しげな息づかい、つばを飲み込む音、そして、自分のそれと比べ、ずっと大きくて力強い鼓動。軍服の香りも彼女の知っている従兄弟のものとは違っていることに、エリザベートはこの時初めて気が付いた。

「フロイライン」

意を決したように、一つ大きく深呼吸をして目を閉じると、ビッテンフェルトはエリザベートの耳元で唇を動かした。エリザベートは一瞬大きく瞳を見開き、それからゆっくりとうつむいた。唇の動きが止まった時、二人は二人だけの世界にいた。雷鳴さえもその世界には入ることを許されなかった。エリザベートの純白の頭が上下に揺れるのを自分の胸に感じて、ビッテンフェルトは大きく息を吸い込んだ。気付かぬうちに息を止めていたのである。開放感と幸福感がビッテンフェルトを満たしていった。

数瞬の間があつて、ビッテンフェルトはエリザベートの顔を上向かせると、ややぎこちなく接吻した。エリザベートは最初、体を固くしてそれを受けていたが、やがて少しずつ体から力をぬき、ビッテンフェルトの胸に顔を埋めた。

もし、ビッテンフェルトの僚友達がこの場に居合わせたならば、きつとこう言つて驚いたに違いない。

「ビッテンフェルトにささやくなんて芸当ができたのか？」

と。幸いなことに、口の悪い僚友は一人も同席を許されなかった。

然し、いつも部外者とか目撃者という者は存在するもので、この時その当番に当たったのはラーベナルトであった。ラーベナルトは停電で明かりが消えてしまい不便であるつと非常灯を二人のいる部屋へ持つて来たのである。ノックはしたが、おそらく雷鳴の為に中にいた二人は気付かなかつた。ドアを開けたラーベナルトの目に飛び

込んで来たのは、稲妻の青白い光に浮かび上がった、二人の抱き合う姿であった。ラーベナルトは音を立てぬようにドアを閉め、引き返した。

居間の壁に掛けられた幾つかの額縁　　そのうちの一つをラーベナルトは壁から外して見つけた。額縁のガラスの向こうにいるのは、黒っぽい髪と薄茶色の目をした士官学校の生徒で、ダークグレーの髪と蒼みがかかった灰色の瞳の三歳位の女の子を抱いていた。

ラーベナルトの記憶が二〇年以上遡る。少年っぽさの残る声とする。

「エルザ、エルザ、幸せになるんだよ、うんと幸せにね。お前の為なら、僕はどんな事だつてしてあげるからね、エルザ。」

（パウル様、よろしゅうございましたな。あの方ならば、きつとエリザベート様を幸せにして下さいましょう。）

ラーベナルトの両眼から熱いものが溢れ、ガラスの上に温かな水滴が転がった。

あの嵐の夜から三日経って、ビットンフェルトとエリザベートは、揃って皇太后ヒルデガルドの許を訪れた。二人の婚約の報告を受けて、ヒルダは心からの祝辞を述べた。

「お二人とも、本当におめでとございます。こうなれば良いとずっと思っていたのです。ビットンフェルト元帥、エルザは私の大切な友人です。どうか大事にしてあげて下さいね。エルザ、ビットンフェルト元帥は帝国にとって無くてはならない方です。どうか、良く助けてあげて下さいね、貴女なら出来るわ。」

この時、エリザベートはオーベルシュタイン元帥の遺族年金の受給資格を返還する旨を申し出ている。

「ビットンフェルト元帥と生計を共に致します以上、私にはもう従兄弟の遺族年金の受給資格はございません。資格の返還が筋かと存じます。」

「そう。では、こうしましょう。ルツ元帥の場合同様、何らかの形で社会に役立つ事業を運営する為の基金として、遺族年金と同額

を毎年あてましよう。何か希望はあつて？」

「ではお言葉に甘えさせて頂いて、障害者、特に視覚障害者の救済及び教育にお役立て頂けますなら幸いに存じます。ゴールデンバウム王朝成立と同時に、障害を持つ者は社会から切り捨てられて参りました。補助機器があれば、十分に健常者と同じ生活が送れる方も大勢いらしゃいます。残念ながら、補助機器があつても障害の克服の叶わぬ方もいらしゃいますが、そのような方達にもそれぞれの状態に合わせて、適切な教育・訓練が成されれば大分助かりましよう。もしお聞き届け頂けますならば、惑星オーデインにおける基金活動の拠点として、オーベルシュタイン家の住居を提供させて頂きます。」

こうして、パウル・フォン・オーベルシュタイン視覚障害者支援基金は設立されたのであった。運営にエリザベートが加わったのは言うまでもない。

日、ビットンフェルトとエリザベートは結婚した。新婚の夫婦の住まいには、そのまま旧オーベルシュタイン邸が官舎としてあてられることになり、これまで独身でホテルの一室を宿舎としていたビットンフェルトは、僅かばかりの身の回りの物をトランクに詰め込んで、新しくビットンフェルト邸となる我が家へ転がり込むことになった。住人も調度品も同じであったので、ビットンフェルトにしてみれば「花嫁を迎えた」と言うより「婿養子に入った」気分であったかもしれない。

結婚式もその後の祝宴も、官舎の庭を使って行われ簡素なものであったが、出席者の顔ぶれは豪華そのものであった。

国務尚書ミッターマイヤー元帥一家、宇宙艦隊総司令官ミュラー元帥、軍務尚書メックリンガー元帥、憲兵総監兼帝都防衛司令官ケスラー元帥、幕僚総監アイゼナツハ元帥、軍務省官房長フェルナー中将も故オーベルシュタイン元帥の直属の部下として招待されていた。

シュワルツ・ランツェンライター

黒色槍騎兵艦隊からは、副司令官ハルバーシ

ユタツト大将、参謀長グレーブナー大将、副参謀長オイゲン中將が出席していた。もつとも、シュワルツ・ランツェンレイター 黒色槍騎兵艦隊の兵士達は式場には登場しなかったものの、我らが司令官閣下の結婚を喜び、フエザーン市内の酒場で祝杯を挙げており、あまり祝い方が激しくて憲兵隊の世話になつた者も多数出た。

ルーヴェンブルン

獅子の泉の七元帥の中で、イゼルローン要塞総司令官ワーレン元帥は、結婚式には出席出来なかったが、祝辞を立体映像で送つて来ていた。

「ビッテンフェルト、結婚、誠にめでたい。心よりお祝い申し上げます。それにしても、卿がオーベルシュタイン元帥の従姉妹を奥方に迎えるとは正直言つて驚いている。帝国と共和主義者が共存する時代だ。ビッテンフェルト家とオーベルシュタイン家の者の共存も可能だろう。平和な世の中になつたものだ。奥方を大事にしる。奥方、猪を頼みます。」

かつて、ビッテンフェルトがハイネセンでオーベルシュタインと対立し、ワーレンとミュラーの

尽力で事無きを得た事を知る出席者達に、この祝辞は共感を持って受け取られた。そして彼らは、ワーレンが、奥方を大事にしろ、と言ったのも彼の心からの助言だと知っていた。ワーレンは結婚後一年あまりで夫人を亡くしていた。そして短い結婚生活の殆どを星路で過ごし、夫人の傍らに居てやれなかった。その事は軍人である以上仕方無いことと思ひ決して悔いてはいなかったが、どんなに愛していても、死んでしまつてからでは何もしてやれないのだと言ふ事実を、ワーレンは夫人のことを思い出す度に突きつけられていたのである。

祝宴の片隅で、ミッターマイヤー元帥はケスラー元帥と並んで立っていた。少し離れた所では、もうすぐ三歳になるフェリックスがエヴァンゼリンの手を引っ張つて花壇の方に歩いていく。母親に花の名前を教えて貰おうとでもいふのである。エヴァンゼリンの腹部は僅かに丸みを帯びて膨らんでいた。夏には家族が一人増える予定であつた。

「ミッターマイヤー首席元帥、どちらが御希望ですか？」

「何がだ？」

「お子さんですよ。男の子ですか？女の子ですか？」

「息子はもういるのでね。次はエヴァによく似た女の子がいいな。」

「でも、男同士兄弟というのも悪くありませんよ。」

「ああ、そうだな。それにしてもケスラー元帥、無事にここまで来ることが出来たのは卿の御陰だな。礼を言う。」

「いや、私はなにもしてはおりません。ビッテンフェルトに、卿は恋をしていると教えただけです。」

「自分の気持ちに気付いたビッテンフェルトが、フロイラインに突進して押し倒してもしたらどうしたものかと心配したが……。そんな事になつたら関係修復不可能だからな。」

「いや、ビッテンフェルト元帥はそんな事をする

男ではありませんよ。」

「どうして判る？」

「判ります。あいつの矜持が許しません。あいつには、あいつに相応しい堂々とした恋しか出来ません。」

「ふむ。ところでケスラー元帥、次は卿の番だな。」

「えっ、……御存知でしたか？」

ミッターマイヤーは微笑してうなずいた。

「マリーカが、二〇歳になったら結婚しようと思つています。」

「何故二〇歳なんだ？」

「憲兵総監が未成年者と結婚というのはまずいでしょう。」

「俺と結婚したとき、エヴァは一九歳だったが。」

「花婿の年齢をお考え下さい。首席元帥は二四歳でしたが、小官は四一歳です。この間もマリーカと食事に出かけたら、店の者にお嬢様ですかと聞かれました。結婚して子供を持つたら、おじいちゃん和孫とでも思われるかも知れません。」

でも、そんな生活も良いと思うケスラーであった。祝宴の中心では、新郎新婦が列席者に囲まれて祝福を受けていた。オレンジ色の髪をした猛将は大声で礼を言い、冷やかされても大声で笑い飛ばした。純白の髪の花嫁は、少し恥ずかしそうに目を伏せ、夫となった男性の腕に手を置き、時折夫の顔を見上げる瞳には、信頼と愛情が溢れていた。どちらも幸せそうであった。

ラーベナルトは祝宴の進行を任されており、ジューズだのワインだのチーズだのが十分に足りているか、各テーブルに目を走らせていた。

彼はビッテンフェルトとエリザベートの婚約を二人から知らされた時、二人の結婚と同時にエリザベートの許を辞する旨を伝えた。然し、ビッテンフェルトはそれを許さなかった。

「ラーベナルト、お前には死ぬまでフロイラインの近くに居て貰わんと困る。ヴァルハラ 天上のオーベルシユタイン元帥にエリザベートがどんなふうに着せられているか、伝えに行つて呉れるような殊勝な奴はお前位しかおらんからな。精々長生きして、

しっかり見てから逝ってくれ。」

ビッテンフェルト以外の人間が言ったら、何とも無礼千万な台詞であったが、これが彼なりの優しさの表現とラーベナルトには判っており、一生を二人の近くで過ごす事を誓ったのであった。

祝宴が終わり、出席者が最後の挨拶をして次々と引き揚げ始めた。一番最後に最も若いミュラー元帥がやって来た。

既に夜の帳が降り、星が輝き始めた空を見上げ、ビッテンフェルトは若い僚友に話し掛けた。

「なあ、ミュラー元帥、俺はオーベルシュタインが生きていた頃、奴のことが大嫌いで、早く死ぬばいいとさえ思っていた。どうしてあんな奴が生きているんだって、天を恨んだ事もある。今でも奴のことは好きになれん。だが、最近思うのだ。人間って奴は、どんな奴でも生まれて来た理由、生きていく訳っていうものがあって、居なくなつて良い人間なんていないのではないかと。みんな、何処かに必要だから生まれてくるのさ。オーベルシュタインの奴がいなかったら、エリザベー

トは今頃生きていなかっただろうし、俺もエリザベートに会えなかっただろう。エリザベートを助けて育ててくれたというだけで、俺はあいつに感謝せねばならんのかも知れんな。」

随分自分本位な言い方の方のようであったが、何となくビッテンフェルトの言いたい事が判るような気がして、ミュラーは

「そうですね。」
と頷いた。

最後に少しだけ、この夫妻のその後について記しておこう。

ビッテンフェルト元帥は後に王党派の指導者として活躍した。共和主義者のリーダー、ダステイン・アッテンボローとの度重なる舌戦と何回かの乱闘は、長く人々に語られる事となった。

エリザベート夫人は、夫の良き助言者として常にその傍らにあった。確かな識見と冷静な判断力、そして穏やかで、居るだけでその場の空気を和らげる人柄は、誰からも愛された。

夫妻は男子二人、女子二人、計四人の子供に恵まれた。

長男パウル・フリッツ・ビッテンフェルトは父と同じオレンジ色の髪をしていた。姿は父そっくりであったが、性格は正反対と言って良く、長じて官僚となった。「オレンジ色のオーベルシュタイン」と呼ばれている。

次男アーダルベルト・ヨーゼフ・ビッテンフェルトは黒っぽい髪と薄茶色の瞳をしており、兄とは逆に、外見はオーベルシュタインに似ていたが、性格はビッテンフェルトそのもので、軍人への道を進んだ。

長女アナスタシア・ビッテンフェルトは、最も母親似で、当然の事ながら、父親の掌中の珠であった。

そして、次女ヴィオレッタ・ビッテンフェルトは、黒髪とすみれ色の瞳、そして「エリザベート夫人の声帯とビッテンフェルトの肺活量の賜物」とメックリンガーが評した素晴らしい歌声の持ち主で、不世出の歌姫として銀河を席卷した。彼

女の銅像は今も帝国オペラ劇場の前に立っている。

(完)

【作者あとがき】

初めまして。イヌラー舎の飼い犬、フミラです。
この度は、小官の作品をお読みいただき、ありがとうございます。ごさいました。「パウル」は小官の初めて書いた作品です。構想二日、執筆五日、パソコン入力一日という筆の勢いに任せて書いた作品です。ですので、読んで下さる方に果たして満足して頂けるかと不安です。

筆の勢いに任せて書いた作品と言っても、決していい加減な気持ちで書いた訳ではありません。銀英伝を知ったときから、興味ある人物が如何なる生い立ちでその人格を形成するに至ったのか、また新帝国暦三年七月二十七日以降どうなったかを想像して読んでおりましたので、我が飼いが、銀英屋台なるホームページを発見し、そこに載せられた作品を見て、自分も書いてみようかな、と思ったときには、既に私のオーベルシュタイン元帥に対するイメージはほぼ出来上がって

おりました。構想に要した二日というのはストーリー展開のための時間です。

我が飼い主は、「パウル」をビッテンフェルトの話として読んでくれました。それもまた事実です。しかし、この作品の出発点はオーベルシュタイン元帥でした。オーベルシュタイン元帥の生い立ち、それに絡む少女の存在、オーベルシュタイン元帥の死後、彼の想いを受け継ぐ人物、その順番でストーリーは決まっていきました。その事を言いましたら我が飼い主は

「そうだったの？」

と少し驚いておりました。小官がビッテンフェルトのことも気に入っていると知っていたからでしょう。

当初、エリザベートに心を寄せる人物として小官の頭に浮かんだのは、温厚なミュラーでした。でも、殆どその場で却下されました。（ミュラーファンの人、ごめんなさい！）次に候補に挙がったのがビッテンフェルトでした。彼の強い個性ならオーベルシュタインにも負けないだろうと思

つたのです。また彼も小官の生い立ち推察記の登場人物でしたし、心の何処かでビットンフェルトにもオーベルシュタインの有りようを認めて欲しかつたのかも知れません。

尚、ホームページでこの小説を公開後、次のような質問を頂きました。

「オーベルシュタイン以外には心を開かなかつたエリザベートが、どうして簡単にビットンフェルトには心を許したのでしょうか？」

これは、私の中では次のような理由によります。

…オーベルシュタインの訃報を持って訪れたビットンフェルトを、エリザベートは亡くなった従兄弟の最も親しかった人物と誤解したのです。オーベルシュタインはエリザベートに余計な不安を与えぬ為にも、僚友との関係や仕事の話題を彼女の前ではしませんでしたから。彼女はビットンフェルトの献身を、オーベルシュタインへの友誼故と信じておりました。そして、真実を知る頃には、ビットンフェルトはエリザベートにとって、「パウロ兄様の大切な友人」としてではなく、「ビ

ツテンフェルト」として、心の中に住みついていたのです。私の筆が足りず、十分にそのことが作品中に表現できませんでした。ここで邪道ですが、補足させて頂きます。

我が飼い主は、小官の描くところのオーベルシュタイン元帥は、少々ロマンチストに過ぎるのではないかと感じているようです。まあ、百人の人が本を読めば、百通りの感想が生まれるわけですから、小官のイメージに不満な方が居るのは当然と言えましょう。

小官としては、心の底まで無機的なまでに冷え切った人物に偉業は成し得ないと考えております。表面はどう見えようと内には熱い心を秘めていてこそ難題にも立ち向かえるのではないかと。そして人の上に立つのに最も適しているのは熱い心を人一倍持ちながらも、決して感情に流されることなく冷静に大局を見つめて判断を下せる人物なのだと思います。オーベルシュタインがライnhルトに望んだのはそれではなかったかと思うのですがどう思われますか？勿論両者を両

立させるのは難しいことで、ヒルダが危惧したようにラインハルトの感性を干上がらせ虚無に陥らせるかもしれません。名君が名君で有り続けるのが難しい所以でしょう。しかし、オーベルシュタインは自分の若い主君に血の通わぬ機械人形や権力の亡者になることを望んではいなかった筈です。

皆様の御感想をお待ちしています。御批判でも構いません。小官以外の方々が銀英伝をどの様にとらえ、登場人物にどの様なイメージを抱いておられるのかを知ることが出来ましたら、小官も銀英伝をもっと色々な角度からとらえられるようになると思います。

(フミラ)

【お断り】

本作品は『銀河英雄伝説』のファンとしての強い思い入れから生まれたものであり、決して原作者（田中芳樹氏）の利益を妨害する目的で書かれたものではありません。

この作品の著作権は、作者フミラ及び発行元イヌラー舎にあります。無断に内容を変更したり、販売したりしないでください。出版物やホームページ、或いはそれに類するものに掲載されたい方は、ご一報ください。

【書名】 パウル（第四版）

【著者】 フミラ

【編集】 ノリラ

【発行】 イヌラー舎（平成十二年）

【Eメール】

inura@mx1.tiki.ne.jp

【ホームページ】

<http://ww1.tiki.ne.jp/~inura/>

<http://www7.freeweb.ne.jp/novel/inura2/>